

43381

教科書文庫

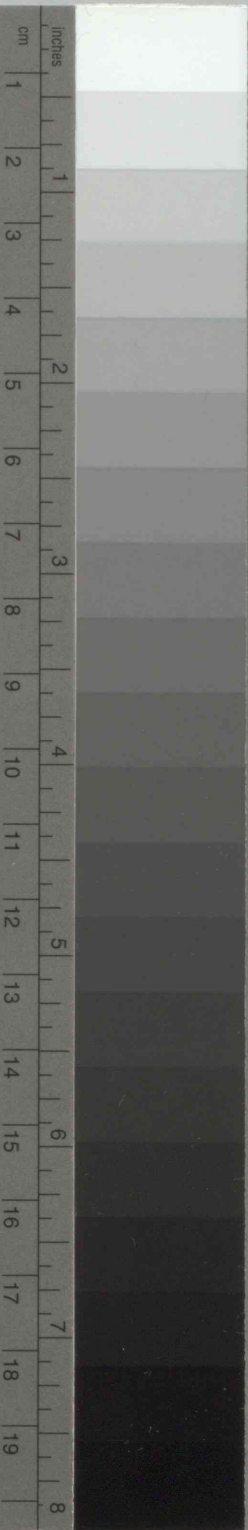
4
810
51-1943
20000 19770

Kodak Gray Scale



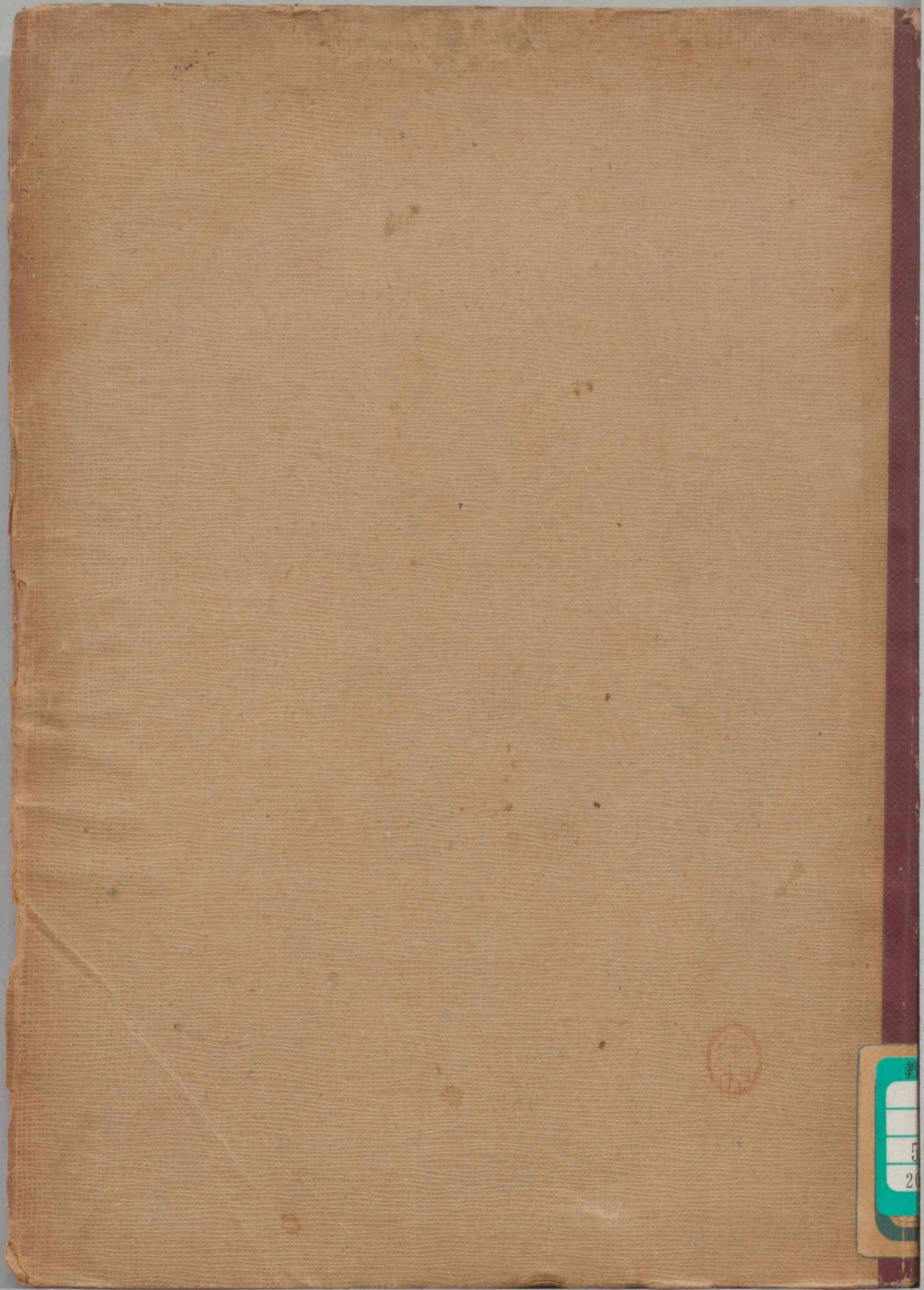
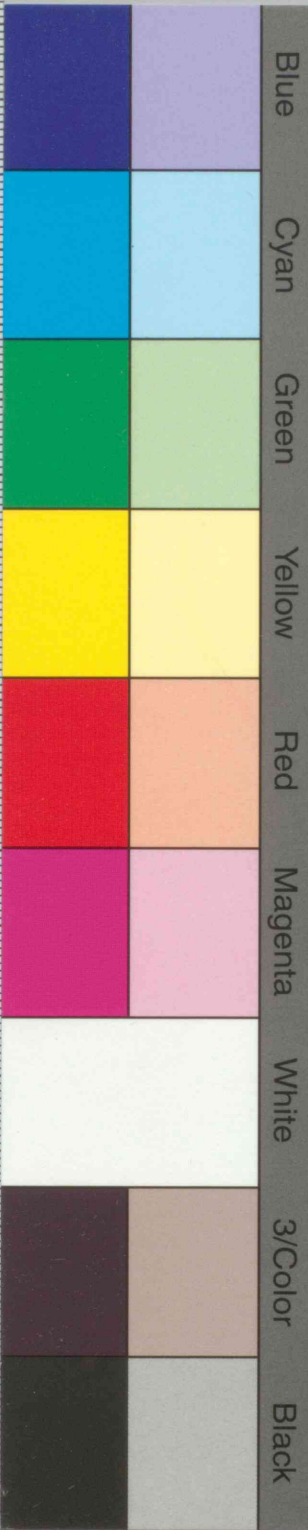
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室
中央圖書館

教科書文庫
4
810
51-1943
2000019770

375.9
On9

75.9
Dn9

大西雅雄著

國語音聲學教科書 全



株式會社
文學社
藏版

広島大学図書

2000019770



959
Dn9



自序

特にわが國にあつては、國語の愛護といふことは、まことに「國體の尊重」と離れることの出来ない深い關係がある。それは、大切な國民的精神や感情といふものが、建國の大昔からこの國語を通じてこそ、鍛へられ築かれて來てゐるからである。

しかも、その「國語」の本體は、いはゆる「學問」といふ形式の情性のゆゑに、今日なほ過分に偏重されてゐるやうな、單なる記録手段たる文字、そのものではないのである。國初以來わが祖先が明けても暮れてもたゆみなく守立てて來たものは、げに言靈のひびきを宿すてふ生ける音聲、國語、自體でなければならぬ。この「音聲國語こそ、最も日本的なるもの」の據るべでなくて何であらうか。さて、國語の音聲研究を輕視して、何の國語研究ぞ、國語教育ぞ。

759
Dn9

われらは「祖國」を護る氣魄もて祖語を愛し、昇る「日章旗」をみつめる熱意もて高鳴る母語に耳そばだてなければならぬ。「國語音聲學」はこの意味において、國語愛護の曙に向つて、おのづから推進するであらう。

昭和十二年初秋

著者識す

凡例

- 一 本書は師範學校・中學校・高等女學校の上級における國語科・高等師範學校・音樂學校・聾啞學校教員養成所等の音聲學科に適するやう著述したものである。
- 二 第一章から第四章までは、謂はば概説で、言語における音聲の位置・音聲の性質・生理條件からみた調音と聴取音聲研究の據點を、平易と要領とを旨として略述した。
- 三 第五章から第十七章までは國語音聲の各論で、つとめて我國の傳統的音圖觀に立脚して、醇正なる國語音の闡明を試み、新にその理論的整序を加へることを怠らなかつた。
- 四 第十八章から第二十五章までは、活用時における國語音聲の各論で、連音の諸相を明かにし、特に音節・アクセントの表現力、イントネーション・プロミネンスの陳述力を立論して、學習心理的考慮を加へた。
- 五 第二十六章は本書の結論であつて、又音聲教育の方向指針を述べたもの

凡例

259
Dn9

凡例

である。國語教育の徹底は、結局音聲研究に端を發し同時に之によつて大尾の完成さるべきものである事を主張する。

六 各音の解説には、最新のX光線實驗に基く口形圖を一般化して製圖し又出来るだけ數多く之を挿入した。なほ必要なる章には各題目の練習題を設けて、理會の助けとした。

七 音聲記號は出来るだけ避けたが、本書に採録した程度のもものは、寧ろ理會の便、研究の利から言つて、一般の學習者に勧めたいものである。卷末には、その一覽表並びに轉寫文例を附して參照に供した。

八 本書は教科書たることを主眼としたもので、大體三十時間を割當てるべきであるが、基礎知識の有無又は他科との連絡如何によつては、十時間内外に切詰めて教授する事も出来よう。本書の參考又は次の段階としては、同じ著者の「教育音聲學」が、一層詳細なる形において、内容體系を共通してゐる。

昭和十二年十月

内容目次

第一章 言語と音聲	
一 言語の本質	(一)
二 文字と音聲	(三)
第二章 知覺と發音	
三 後天的習得	(六)
四 具體性と抽象性	(八)
第三章 聽取器官と發音器官	
五 聽取器官とその働き	(一二)
六 發音器官とその働き	(一五)
第四章 音聲單位	
七 部分音と合成音	(二〇)

内容目次

259
019

八 話音と語音……………(二)
九 フォニーム……………(三)

第五章 母音概説

一〇 母音の特質……………(三五)
一一 母音圖表……………(三五)
一二 母音の分類……………(二八)
一三 ア行の點檢……………(二九)

第六章 ア行各音

一四 「ア」音……………(三一)
一五 「イ」音……………(三三)
一六 「ウ」音……………(三五)
一七 「エ」音……………(三七)
一八 「オ」音……………(三八)

第七章 子音概説

一九 子音の特質……………(四一)
二〇 子音の分類……………(四一)
二一 所謂「五十音圖表」……………(四五)

第八章 カ行各音

二二 「カ」「ガ」「ガ」各行……………(四九)
二三 「キヤ」「ギヤ」「ギャ」各行……………(五一)
二四 「クワ」「グワ」「クワ」各音……………(五三)

第九章 サ行各音

二五 「サ」「ザ」各行……………(五四)
二六 「シャ」「ジャ」各行……………(五五)

第一〇章 タ行各音

二七 「タ」「テ」「ト」・「ダ」「デ」「ド」……………(五七)
二八 「チャ」「ヂャ」各行……………(五八)
二九 「ツア」「ツイ」「ツ」「ツエ」「ツオ」……………(五九)

259
Dn9

内容目次

第一章 ナ行各音

三〇 「ナ」行 (六三)

三一 「ニャ」「ニョ」「ニョ」 (六三)

第二章 ハ行各音

三二 「ハ」行 (六五)

三三 「バ」「バ」各行 (六八)

三四 「ビャ」「ビョ」「ビョ」「ビャ」「ビョ」「ビョ」 (六九)

三五 「ファ」「フイ」「フ」「フェ」「フォ」「ヴァ」「ヴィ」「ヴ」「ヴェ」「ヴォ」 (六九)

第三章 マ行各音

三六 「マ」行 (七三)

三七 「ミャ」「ミョ」「ミョ」 (七三)

第四章 ヤ行各音

三八 「ヤ」「ユ」「ヨ」 (七四)

第五章 ラ行各音

三九 「ラ」行 (七六)

四〇 「リャ」「リョ」「リョ」 (七八)

第六章 ワ行

四一 「ワ」 (七九)

第七章 シン音

四二 「シ」 (八一)

第八章 連音

四三 連音と意義 (八四)

四四 連音の要件 (八六)

第九章 連音の轉化(上)

四五 長音化作用 (九三)

四六 同化作用 (九八)

第十章 連音の轉化(下)

四七 脱落作用 (一〇四)

内容目次

1959
019

四八 轉置作用……………(一一)

第二章 音節

四九 國語の音節……………(一四)

五〇 音節の原理……………(一六)

五一 音節とリズム……………(一九)

第三章 アクセント節

五二 アクセントの本質……………(二三)

五三 アクセントの型……………(二五)

五四 アクセント單位とアクセント節……………(二七)

第四章 文章法

五五 イントネーション……………(三一)

五六 イントネーションの形式……………(三三)

第五章 卓立法

五七 プロミネンス……………(四一)

五八 卓立法の形式……………(四三)

第二章 音聲形態

五九 音聲形態……………(四七)

六〇 表現形態と陳述形態……………(五〇)

第六章 國語と音聲教育

六一 標準音と標準アクセント……………(五三)

六二 國語 美……………(五七)

〔附 録〕

1 音聲記號一覽表

2 音聲轉寫文例

—目次終—

1759
019

廣島大學
圖書印

國語音聲學教科書

大西雅雄著

第一章 言語と音聲

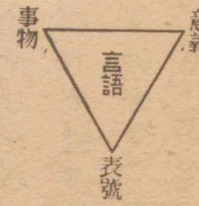
一 言語の本質

言語の本質
事物
表號
音號・記號
意義

言語は人間生活の「事」又は「物」に關聯する。従つて、その要素の一つには事物が在る。そして言語は事物を一々用ひないで所用を達するための文化手段であるから、それらの事物を代表するもの即ち表號が第二の要素である。表號の本體は後にも説くやうに音號(音聲)であるが、その副次的なものは記號(文字)である。次いで、事物と表號との關係を限定するものが第三の要素で、意義は之に

1959
On 9

意義



あたる。

この三つの要素は、いはば「言語の本質」といふ鼎の三脚の如きもので、その要素の孰れの一つが缺けても存立するものではない。三者は實に、上圖のやうに相貫關係によつて連り合つてゐる。

物・事

今例をもつて右圖にあてはめて見ると、茲に「筆」の實物があり、「書く」といふ實際行動があるとすれば、「筆」は物であり、「書く」は事であるから、之らは「事物」である。そして、之らには「フデ」「カク」(いづれも假に音を示すものとす)といふ音號が伴ひ、同時に「筆」「ふて」「フデ」「書く」「かく」「カク」「Kaku」の如き記號が約束されてゐるのは、共に「表號」にあたる。又「筆」といふ物にも、「書く」といふ事にも、人々に通ずる一と通りの定義といふものがあつて、個人が氣儘に解釋することは出来ない。即ち「意義」が備はつてゐる。このやうに三者が聯合して、我々日本人に一定

言語・國語

の概念を與へる「筆」なり「書く」なりは「言語」であり且つ「國語」である。

文字と音聲

二 文字と音聲

表號には前述の通り、音號(音聲)と記號(文字)とがある。そこで、言語が「話」として用ひられる時は、それが音號の活動であることに誰も疑をもたない。しかるに、言語が「書きもの」にせられた時は、單に記號だけの活動でもあるかのやうに考へられ勝ちなのは注意を要する。

圖案・風景

文字がいくら視覺に訴へられるものであるといつても、その刺戟は圖案を見たり風景を眺めたりする場合に受けるものに比べ、と心の働きが全然違つてゐる。即ち、**圖案**や**風景**は之を注視することによつて、好んだり好まなかつたり、賞讚したりしなかつたり、といふやうな感情方面の動きは起るが、別に一定の音聲といふ

1959
On9

文字

ものは伴はない。しかるに、文字に接する時は、その眼からの刺戟が必ず一定の「音聲」に聯合しなければならぬ。

前出の例でいへば「筆」には「フ・デ」又は「ヒ・ツ」といふ音、「書」には「カ・ク」又は「シヨ」といふ音が附随してゐる。假令、假名文字にしても「ふ」には「フ」といふ音、「て」には「テ」といふ音があるやうに、文字が記號であるといつても決して音號と無關係にはあり得ない。即ち、言語の表號は原則的にはどこまでも音號であつて、文字はその記録手段に過ぎないのである。

更にこのことは、文字が無くとも言語は在り得るに對し、音聲無しでは言語は絶対に在り得ない事實を直視すれば明かである。之は一般言語についての眞理であるが、我が國語においても同様である。文字は今から千五百餘年前他國から輸入せられた事になつてゐるが、それより以前と雖も日本國語は嚴然として存してゐた。又今日でも文字を學ぶ前の幼兒、或は文字を學んだことのない老人、又は盲人の間にも、音聲器官に支障さへなければ、國語の恩恵、いはゆる「言靈の力」は擱むことが出来る筈である。

1959
On 9

第二章 知覺と發音

後天的習得

三 後天的習得

何人も言語を所有して生れるものではない。生後一ヶ月頃から無意義な單音を發し初め、八ヶ月頃から單語を一つづつ覚えて行き、次第に纏まつた言葉をも述べるやうになる。

つまり、言語は後天的の教育によつて習得されるものである。その教育は普通、經驗といふ、事物との遭遇につれて、音聲といふ、表號の提示が起り、更に適當な手續によつて、意義の理會作用があつて、個人々々の腦裡に言語は構成されて行く。

表號の提示は、最初、父母兄弟の如き親しいものによつて行はれる「音號」が専らである。「記號」はずつと後の學齡期に入つて教師か

經驗

ら與へられるのであるが、この時期と雖も「記號」の教育と共に「音號」の教育は省かれることは出来ない。否、「音號」と無關係に「記號」だけを授けることは全く不可能の業に屬する。

かく重要な位置を占める「音號」の獲得される各個人の直接的な言語窓は、その知覺器官である。知覺器官の中で、外部に在つて代表的なのは耳で、その働きは聽くといふ仕事である。但し、「聽く」といふこと自體を直ちに音聲の把握といふことは出来ない。引續いて自らの聲帶を用ひて發聲して見ることが大切で、或學者は「人は自分で發し得る音だけしか正しく聽き分け得ない」と言つてゐるほどである。

耳・聽く

聽く・發する
音聲表象

兎も角、聽くと發するとは音聲習得の二大要件であつて、兩者は互に物の表裏關係に在ると言へよう。かくて、頭腦の中に音聲的の映像の出來上ることを音聲表象の成立といふ。換言すると、音

1959
On9

聲表象とは心の中に浮ぶ音聲の姿、又は音聲の記憶像である。例へば「ふ」といふ文字を見て、その音「フ」が心に浮び出るのは、その音聲表象が活動したのである。

我々は、他人の談話を聴いて、自らの腦中に所藏せる音聲表象を蘇らせて意義に聯合させ、又自ら談話せんとするに當つては豫ねて自らの貯藏せる音聲表象を働かせて、文章形式を纏め上げるものなのである。

音聲表象の成立と同様に、文字に對しては文字表象、意義に對しては意義表象、事物に對しては事物表象が、廣義の知覺器官によつて成立して行く。之らの一體となつたものを言語表象といふ。言語の學習とは要するに、之ら表象の後天的習得を指すわけである。

文字表象
意義表象
事物表象
言語表象
具體性と抽象性

四 具體性と抽象性

人間が言語を習得するには、必ず自己以外の誰か先輩の音聲を聴かなければならぬ。この音聲を聴かせる先輩は、最初一人の場合もあり、多數の場合もあるが、孰れにしても必ず音聲的個性を備へた者である。

その個性は、俗にいふ「聲色」の特徴もあらうし、音の「長短」「高低」「強弱」並びに全般的「語調」などにおいて、いはゆる百人百種、千人千種に相違したものである。又、この相違は個人による外に、假令同一人と雖も發音する單語によつて、發音する時によつて、發音する状況によつて、等々で千種萬別の屬性を有するものと見てよからう。かく現實の様々な場合の音聲的特色を、音聲の具體性と呼ぶ。

人間が言語習得に當つて外部から加へられる音聲刺激は、右の如く具體性を帯びたものである。従つて、それぞれの音聲は何某々々の音聲であつて、直ちに之を以て日本語の標準音、又は國語音

音聲の具體性

959
On9

の代表と見做すことは出来ない筈である。

しかし、一方において學習者自身にも問題がある。それは假りに學習者の有する知覺が相當精妙に働いた所で、その發音器官は必ずしも知覺に正比例する活動能力を有しないといふ嚴然たる生理的事實の存在である。一例を以て言へば、母に「カキクケコ」を習ひ、父に「サシスセソ」を授けられたからといつても、カ行は母の聲色及び音調・サ行は父の聲色及び音調をそのまま體得し再現し得るものではないのである。

音聲の抽象性

即ち、この際は母とか父とか或は兄とか姉とかの個人的屬性に基く音聲的特徴は捨てられて、それらに共通した「音色」だけが取り上げられて音聲表象を構成するやうになつてゐる。この働きを音聲の抽象性と言ふ。

かく人間は、諸種の音聲を抽象化した形において頭腦中に納めるが、さてその個人が自ら言語を驅使する段に立到ると、決して純粹の抽象形を再現するものではない。今度は自らの屬性を加味して、その人自身の具體音とする外はない。この具體化された發聲は、その人自身の聽官によつて充分に知覺され認知されてゐるものである。言語音はその習得の時に於いても、その後の使用の時に於いても、常に「具體化…抽象化…具體化…」の行程が繰返へされてゐる。この間に於つて、「知覺」と「發音」の働きは相關的の役目をして、音聲の調節を圖つてゐる。

具體性と抽象性との關係は、文字表象についても、意義表象についても同様のことが言へる。實はこの原則の故にこそ、言語がよく「表號」として事實又は實物の代用たり得るのである。

1959
On 9

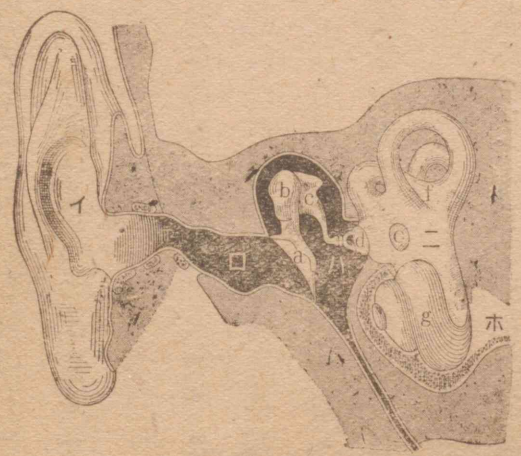
第三章 聴取器官と發音器官

聴取器官とその働き

五 聴取器官とその働き

音聲の知覺は聴取器官によつて達せられる。聴取器官は耳鼓(イ)・外聴道(ロ)・中耳(ハ)・内耳(ニ)・聽神經索(ホ)の五部から成つてゐる。

耳鼓(イ)は普通に「耳」と呼ばれてゐるもので、介殼のやうな形をして居り、内面には襞がある。音波はこの襞に當つて反射し、耳孔へ集中される。



第 2 圖

外聴道

外聴道(ロ)は深さ三糎半ほどの骨管で、中途で一度凸隆し再び下つてゐる。これは鼓膜及び内耳の保護の役目の外に音聲を導

入して鼓膜に直射させる働きがある。

中耳

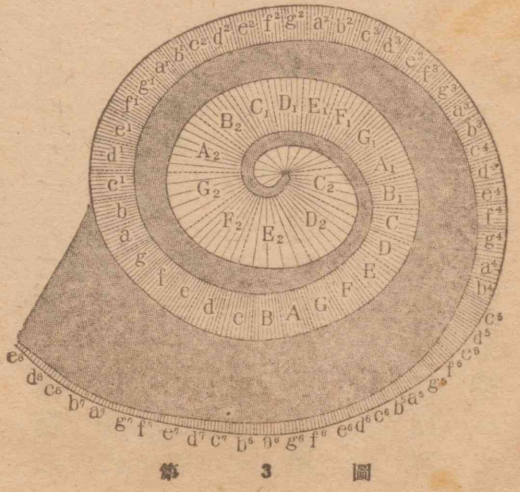
中耳(ハ)には第一鼓膜(a)と第二鼓膜(d)とがある。又、その中間には槌骨(b)・砧骨(c)・鐙骨(d)の三個が組合つてゐて、第一鼓膜の受けた振動を第二鼓膜へ導入する。この三個の骨は槓杆仕掛に作用するから、第一鼓膜の受けた振幅は第二鼓膜では三分の二に減少して傳へられる。要するに、中耳は外界の空氣波動を鼓膜の強迫振動によつて受付けて、之を精細に内耳の淋巴液に傳へて壓力振動を起させる役目である。

内耳

内耳(ニ)は骨性迷路と呼ぶ特殊な形狀をした管で、内部には淋巴液が充滿されてゐる。この管の蝸牛殼(g)は凡そ二回半捲いてカタツムリ狀をしてゐる。内には細い索狀で成る基礎膜が、恰も

1959
On 9

織物の横糸のやうに張られてゐる。その幅は下圖のやうに、蝸牛殻の入口ほど狭く、奥の方ほど廣く張られてゐる。それで、淋巴液の振動が傳はると、基礎膜の狭い所は高度の振動に、廣い所は低度の振動に、それぞれ共鳴振動を起す。振動數の種類は凡そ一秒付十六(C²)から四萬(e⁸)までの範圍に互るといはれてゐる。



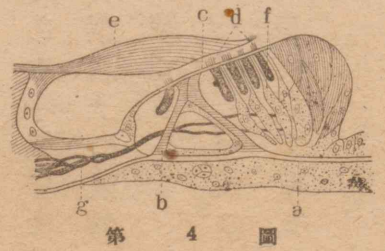
第 3 圖

かく基礎膜が振動數に呼應して、その局部々々が共鳴を起すといふ事は、次章に説く「部分音」の一つ々に共鳴するのであつて、組合つた「合成音」に對してではない。即ち、内耳は音波をその要素に分析する箇所である。

聴神經

聴神經 は蝸牛殻内の基礎膜上にある聴細胞と、之から導線を成してゐる聴神經索と、更に大脳中樞の聴神經より成立つてゐる。

今、骨性迷路の或部を横斷して見ると、基礎膜(a)の上にコルチ氏柱(b)と呼ぶ軟骨があつて、網狀膜(c)を張り上げてゐる。この網狀膜には聴細胞から出た細毛(d)があり、基礎膜の振動を受けると、上部に覆ひかかつたコルチ氏膜(e)に接觸するやうになつてゐる。この刺戟に感應した聴細胞は、之を聴神經索(g)を通じて、大脳の聴神經に傳へ、そこで部分音及び音聲諸相の統合作用が行はれて音聲知覺は完成するのである。



第 4 圖

發音器官とその働き

六 發音器官とその働き

發音は呼吸器官及び消化器官の或部分と兼用で達せられる。

259
Dn9

横隔膜と肺臓

その主な部分を大別すると、横隔膜・肺臓・気管支・気管・喉腔・咽腔・口腔・及び鼻腔である。

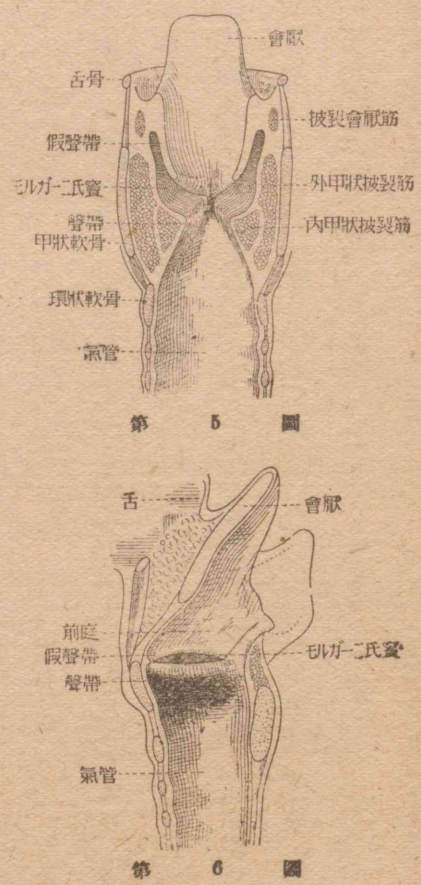
横隔膜と肺臓 發音に對する肺臓は單なる氣囊に過ぎない。又その運動は全く受動的で、之に伸縮を與へるものは、通常横隔膜の上下運動である。特殊の場合には胸廓の張り弛みや、肩部の上下動が肺臓の伸縮を援ける。發音の重要な要素である呼氣を作り出すと同時に、一と息の音聲の長短を定めたり、言葉調子に強弱又は流暢さを與へたりするものは、實に横隔膜と肺臓である。

氣管支と氣管

氣管支と氣管 之は單に呼吸氣の輸送管である。但し、一種の共鳴管の役目をも帯びて、或程度まで聲色の決定に參與してゐるといはれてゐる。

喉腔・聲門

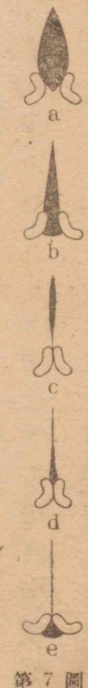
喉腔 之はいはゆる聲門にあたり、左右二枚づつが向合つた聲帶、第5圖正面及び第6圖側面がある。上部のを假聲帶といひ、下部のを眞聲帶といふ。



呼吸聲門・いき
無聲音
氣音聲門・氣音・發聲門
聲門
こゑ・有聲音

その中間の窪はモルガニニ氏竇といつて眞聲帶を潤す液を分泌して居り、又共鳴箱の働きをしてゐる。假聲帶は飲食物の誤嚥を防ぐ働きをするが、發音には直接の關係はない。眞聲帶は全開放をすると、呼吸聲門第7圖a)といつていき又は無聲音を出す。その角度が稍小さくなると特色ある摩擦音を伴つて氣音聲門(b)となり氣音(h)音を出す。談話をする時は發聲聲門(c)で、開閉々々の作用が繰り返へされこゑ又は有聲音を出す。

259
On9



第7圖

ささやき聲門

調子の高低

咽腔

會厭

軟口蓋

口腔

更に又、弱い「ささやき」の時はd圖のやうに小部分が開かれ、強い「ささやき」の時はe圖のやうに披裂軟骨の後部が開かれる。之らを共に「ささやき聲門」と呼ぶ。

聲門は以上のやうに「いき」(無聲音)・「こゑ」(有聲音)及び「ささやき」の區別をする外に、聲帯の張り弛めによつて調子の高低を掌る重い役目がある。

咽腔(第8圖R)は氣管(W)と同様に呼氣の通路であるが、又共鳴箱の働きも兼ねてゐる。なほ會厭(E)は飲食物通過の際は垂れ下つて喉腔を塞ぎ、發音の際には起上つて喉腔を開く働きをし、軟口蓋(S)は口腔音を發する時は上昇して鼻腔への出口を塞ぎ、通鼻音を發する時は下降して鼻腔への出口を開く働きをする。

口腔は聲門から送り出される「こゑ」又は「いき」を受けて、音聲を

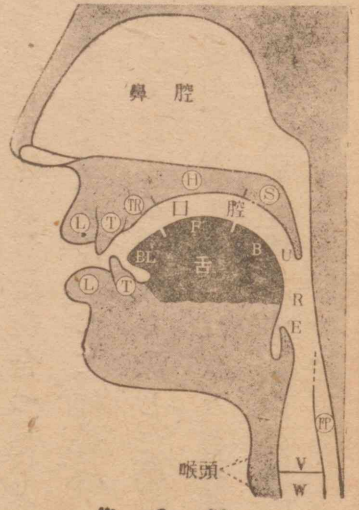
音色

鼻腔

調へる場所である。調音に當つては主として下顎が働きかけるが、上顎でも唇や軟口蓋は可動體である。いはゆる「母音」と「子音」又はそれらの各音の特色ある「音色」はこの口腔が構へる形状と、それに應じて爲される呼氣の放出様式に基く。

口腔各部の名稱は大體、上顎では唇(第8圖L)・齒(T)・齒莖(TR)・硬口蓋(H)・軟口蓋(S)・懸壅垂(U)とし、下顎では唇(L)・齒(T)・舌先(BL)・前舌(F)・奥舌(B)と分稱することになつてゐる。

鼻腔は口腔における特定の調音に對して、鼻腔的共鳴を與へる場所である。呼氣の通過は軟口蓋の昇降によつて掌られ、鼻腔自体には何の可動器官もない。



第8圖

259
On9

第四章 音聲單位

部分音と合成音

純音

合成音 Composite Tone
部分音 Partial Tone

七 部分音と合成音

諸種の「音叉」はそれぞれ固有の振動数をもつて居り、その波形は單一純粹で正規的である。かかる音を名付けて「純音」といふ。樂器の音も波形からいふと、餘程規則的であるが、之は幾つかの音叉を同時に鳴らせたのと同様に、幾つかの正弦波形の組合つたものである。かく組合つたものを「合成音」と呼び、之に對して「純音個々」を「部分音」といふ。人間が聲帶を通じて發する音聲も決して音叉の如き純音ではなく、必ず「合成音」である。逆に言へば、我々の發する「ア」とか「イ」とかは、適當な方法を用ひれば、之を構成する「部分音」に分析することが出来るのである。

上圖は一實驗による「ア」の音響スペクトルで、その部分音は縦線で表示した十七種類である。最大の部分音は振幅が約五〇〇（左側表示）で、その振動数は約七〇〇（下部表示）であるやうに、他の各部分音も夫々の固有振動数と振幅をもつてゐる。

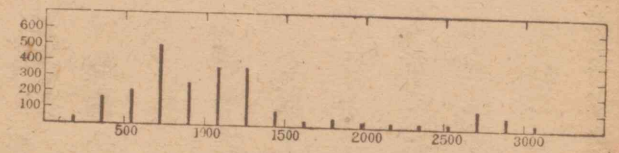
かかる部分音は音の原子的な單位であるが、それは機械的な觀察法によるのでなければ、通常の耳では感知する事が困難である。即ち、第一次的な音聲單位ではあるが、知覺を主とする普通音聲學の研究方法では、その範圍外とする。

八 話音と語音

個人々々が日常の談話に用ひる音聲は各人の個性を帯びて居り、各時の屬性を被つて居ることを既に述べた。即ち、一個の「ア」も

話音と語音

音響スペクトル



第 9 圖

959
Dn9

話音
Speech
Sound

人によつて聲色を異にし、高低・強弱・長短・等の諸條件は一致しないのが常である。従つて、嚴密に言へば、甲の發した音を「ア¹」とすれば、乙のは「ア²」であり、丙のは「ア³」であり、丁のは「ア⁴」であるといふ風に具體音そのものは、理論上、千種萬別であるべきである。之を一つの音聲單位に見立てて「話音(Speech Sound)」と呼ぶ。

音觀念

語音
Phone

次に、甲乙丙丁等發音者の音聲的個性、並びにその發音狀況に基く諸屬性を省いて、別の共通點である調音様式、又は知覺的効果、だけを取上げる事が出来る。即ち「ア¹」「ア²」「ア³」「ア⁴」「アⁿ」から「¹」「²」「³」「⁴」「……」「ⁿ」を捨象して、「ア」だけを抽象するのである。之は一種の抽象音であり、一つの音觀念である。いはゆる國語音として日本國民の聽神經に印象され、表象化されてゐるものである。又、文字「ア」が代表して字典の中に横へられてゐる音觀念でもある。之を第三次的音聲單位として「語音(Phone)」と呼ぶ。音聲學の研究は多くの場合、この語音を據り所とすることになつてゐる。かの音聲記號(又は音標文字)は語音の個々を代表させたものである。

音聲記號
Phonetic
Symbol

フォウニーム

九 フォウニーム

語音の或ものは、言葉を組立てて連音關係に在るとき、他の特定の語音と取替へられても、その言語社會に、その言葉の意義を變更されずに通用することがある。かかる場合の語音を相互に「フォウニーム(Phoneme)」又は「通音」或は「音族」と呼ぶ。

フォウニーム
通音・音族

標準通音
地方通音

之には二種類があつて、一つは「標準國語」の音聲の中に起る場合で、他は「方言對方言」の關係において起る場合である。前者を「標準通音(Standard Phoneme)」とすれば、後者は「地方通音(Diaphone)」である。「標準通音」は連音における前後音の關係發音様式の強弱及び長短關係、又は言葉調子に基くもので、一個人内での現象であり、「地方通

959
Dn9

音は地方的又は個人的慣習による發音法の相違で、異なる個人又は地方を比べ合つた時、又時には同一個人における二種以上の發音型を指すのである。例へば「字」に對して [ɕi] [zi]、[圖]に對して [ɕm] [mz]、[府]に對して [fu] [mɤ] [mu] [mu]、[へ]に對して [u] [u] [u] [e] が共通して當用されて差支のないのは標準通音である。又、甲なる話手が「セ」[se]を用ひる箇所へ乙なる話手が「シエ」[je]を當て、「ツ」[tsu]を用ひる箇所へ「トウ」[tu]を當て、「ヒ」[hi]を用ひる箇所へ「フイ」[fi]を當てるが如きは、兩者が互に地方通音の關係に在るといふのである。

第五章 母音概説

母音の特質

十 母音の特質

母音は原則として有聲音(こゑ)で調音される。口腔では舌その他を上顎に接觸又は接迫させることがないから、呼氣は比較的自由に放出される。音波も比較的規則であつて、心理的には快さを伴ひ、いはゆる樂音又はねにあたる。

母音圖表

十一 母音圖表

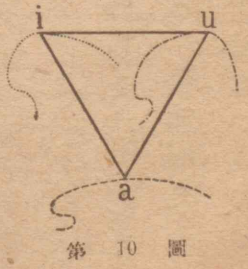
母音各音の相互關係を一覽する便宜から、調音箇所を主とした生理的見地に立つて、圖示するのが「母音圖表」である。最初、獨逸の醫者ヘルヴァークが、西紀一七八〇年に獨逸語の母音について u

ヘルヴァーク C.F. Hellwag

959
On9

母音三角
Vowel
Triangle

â a ä i の五角形を案出し、後一七八三年に i a u の三角形に改めたもので、その後一般に**母音三角形**と呼ばれるに到つた。之は i a u の三音を發するに當つての舌面の最高點を假定して、その三點を繋いだものである。その他の母音は、大體 i a 線上と u a 線上、又は三角面の内部に在ると見られるのである。



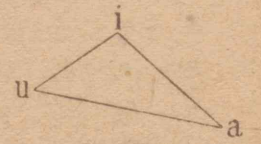
第 10 圖

母音圖表はその後も、或は丁字形に、十字形に、圓形に、梯形に、楕圓形にといふ風に、諸國の學者の案が發表されて、その種類は二三十種にも及んでゐるが、原理は大同小異で、結局、教育的には『**母音三角形**』が今日なほ代表的位置を占めてゐる。

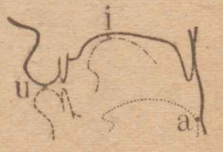
唯一つ、最近の發表で、注目に價するのは米國のオスカー・ラッセ G.O. Russell の新母音三角觀第11圖である。之はヘルヴァーク初め現今も

ラッセ
G.O. Russell

ダニエルズ
D. Jones



第 11 圖

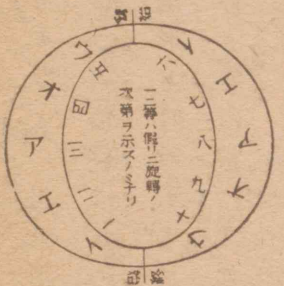


第 12 圖

英國のダニエル・ジョウンズなどの主唱する舌面最高點至上主義を排斥した點に特異性がある。彼によれば、i は舌面と口蓋との狭窄に特徴があり、u は兩唇の狭窄に調音點があり、又 a は奥舌の背面と咽腔壁の狭窄が絶対要件である(第12圖)といふのである。

我國では、ヘルヴァークと殆ど同じ頃の天明四年(西紀では一七八五年)に發表された**本居宣長**の母音圖表が注目されてよい。

本居宣長



第 13 圖

之は單なるウオアエイといふ連環圖であるが、ウとイとを兩端に置き、アを中央に置いた點は、圓と角との相違はあつても、ヘルヴァークの所見と軌を一にするものである。更に二重圓の幅が、アにおいて最も廣くウイに

259
219

母音の分類

おいて最も狭いのは、顎角の表示として意義がある。

十二 母音の分類

前母音・奥母音
中母音
(中舌母音)

小開き母音
半開き母音
大開き母音

「母音三角」に即して i と a との中間に e, u と a との中間に o が位する。今、i — e — a の系列を見るに、之は舌の前部を用ひ口腔の外方で調音され、u — o — a の系列は舌の奥部を用ひ口腔の内方で調音される。そこで前者を前母音、後者を奥母音と呼ぶことになつてゐる。尙この外に、a から i u の中間へ垂直の系列を假定して、之に現はれる音を中母音又は(中舌母音)と呼ぶ。更に顎角の開きを主として観る時は、i u の如く舌面の高い位置のものは小開き母音、e o の如く中位のものは半開き母音、又 a の如く低位のものは大開き母音と稱へられる。概して言ふと、前母音は唇の外形が「平」らであり、奥母音は「圓」やか

平口母音

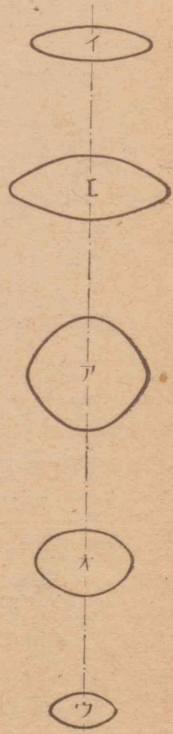
圓口母音

である。従つて、

前者には平口母音

音の名があり、後

者には圓口母音



14 圖

の稱がある。a は兩者に所屬する中間の「大開き母音」である。(但し、a を前母音の系列と奥母音の系列とに分ける事の便利な時は、前のを [a] とし奥のを [ɑ] とする。)

十三 ア行の點檢

ア行の點檢
字母表
音圖

ア行、即ち「アイウエオ」は國語の字母表であると同時に、國語の母音音圖と見做して差支ない。偶々、この順列は梵語の字母表(悉曇章)中の母音表(十六の摩多)中の呼應音の順位と合致する。それはそれとして、今日独自の立場からア行を點檢しても、母音

959
019

聴え
Sonority

三角の理論と共に合理性が潜んでゐる。即ち、ア行が最初に唱へ出す「アイウ」は、母音の調音上、最も特色ある代表的の三音である。聴えの上からも、最も明瞭に隔たる音色を備へたものである。次で各々の中間音であつて、互には相離れてゐる「エ」「オ」を配した事は、全く知覺上の便を圖つたものと言へよう。

繰返して言へば、順列「アイウエオ」は「イエアオウ」又は「ウオアエイ」に比べると、唱へ方の勞力は多いが、それだけ音相互の區別は明確であり、且つ効果的である。

第六章 ア行各音

ア音

十四 「ア」音



第 15 圖



「ア」は口腔の自然的な構へ方で、顎角を最も多く開く音である。唇は別に突き出すことなく、左右に引くこともなく、又齒をわざと顯はす必要もない。顎角の開くにつれて舌面は下がるが、別に特定の箇所を隆起させるにも及ばない。舌面と口蓋との間隔が廣くなり呼氣の放出に力が抜け過ぎると思はれるのを調節するのが、例のラッセルの指摘(27頁参照)した奥舌と咽腔壁との狹窄である。

「ア」は顎角の開きが或度合に達しないと、その音色は「オ」に紛れ、更

259
219

[æ]

[ɔ]

長母音

二重母音
Diphthong
[ai]

[ae]

[aw]

にもし唇に平形を加へる時は「エ」の音色に近くなる。又、口角を左右に引分け過ぎると、名古屋や岡山などで聴かれる「エア」[æ]といふやうな音になる。なほ又、舌面を不必要に浮上がらせると、例へば欠伸などの時のやうな曖昧な「ア」(恰も「エオ」の如き音 [ə])が出る。

「ア」を延長すると長母音の「ア」であるが、実際の場合を厳密に言ふと、延長された音は複母音「アア」となるか、又は前後の音質が變つて [ae] 又は [ae] の如く二音節に割れることが多い。

「ア」は他の母音と連發される時、前音が強まり後音が弱まると、一音節となつて結ばれ、二重母音を構成する。第一は「ア」と「イ」とで「アイ」となる場合で「可愛」[kaai]、「咲いた」[saita]の如く、第二は「ア」と「エ」とで「アエ」となる場合で「歸る」[kaeru]、「お前」[omae]の如く、第三は「ア」と「ウ」とで「アウ」となる場合で「使う」[tsukau]、「洗ふ」[ahau]の如きである。

ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

十五 「イ」 音

イ音



圖



第 16

「イ」は顎角を殆ど閉ぢて、ただ噛みしめない程度で發せられる。唇は通常は上下の齒先が少しづつ覗く位に開かれるが、その開き方は全く自然的で緩かである。幾らかでも聴えをよくしようとすると、口角が引きひろげられ、幾らかでも強く發しようとする、舌面は硬くなつて上昇し、外形からいふと下唇が下齒の齒莖を顯はすほどに引下げられる。

舌についていふと、舌尖は下齒の裏に達せんばかりに垂下つて、前舌部が硬口蓋に向つて持上げられる。但し、そ

159
119

の持上げ方は舌筋の硬直を感じない程度の自然さであるが、持上げたといふ感じははつきり覚える程度である。これラッセルが [i] の特徴として、舌面と口蓋との接近を指摘(27頁参照)した所以である。

中母音 [i]

曖昧音 [i]

無聲化

「イ」は舌面と口蓋との狭窄箇所が奥まり過ぎると、「ウ」の音色に近い曖昧な音、即ち東北や雲伯地方に聴かれる中母音 [i] に外れる。

又、假令舌面は前部を使用しても、顎角が開き過ぎると、「エ」に紛らふ音色(二重母音の後音に現はれる曖昧音 [i] に近い音)を生じる。

「イ」の延長は舌面と口蓋の狭窄を強調させるのが生理の自然であつて、「ア」の長音のやうに二音節に割れることが少い。「イ」の長音を激しくすると、半子音 [j] (即ち「ユ」の子音第十四章参照)に達する。

「イ」は [j] [tʃ] [k] (各子音の章参照)等のやうな無聲子音の間に挟まれると、その影響を受けて無聲化する。

舌唇練習音

イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ

ウ音

十六 「ウ」 音

「ウ」の顎角は前述の「イ」と同様に殆ど閉ぢてゐる。けれども、「イ」は唇を口角まで分離するのに對し、「ウ」はその半分も離さない。通常は上の門齒二枚と、その次のが半分づつ見える程度で、その残りの部分は唇に隠されてゐる。

英佛獨の [u] は普通圓唇母音と呼ばれるやうに、呼氣の出口は全く圓形を呈し、從て唇も突出するが、國語の「ウ」は圓み方が緩漫であり突出は殆ど起らない。音聲

圓唇母音



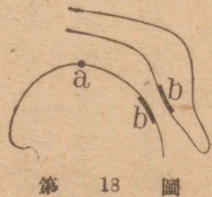
第 17 圖

159
119

[u]

記號では圓唇母音の[u]に對して、國語の如き「ウ」を[w]で表はして區別することになつてゐる。

舌は奥部において高まり又奥まるが、之も國語のは英佛獨ほどではない。一般にその狹窄面はいはゆる「舌の最高點」(第18圖a)よりは奥の傾斜面(b)に現はれる。しかし、之さへも唇の狹窄に比べると遙かに弱い條件であるので、彼のラッセルは唇を[u]の要件として指摘したほどである。



舌面と口蓋との狹窄位置が前進すると、東北や雲伯地方の音の如く、「イ」の音色に近づき中母音[ɨ]となる。この時の唇は舌面の前進に比例して圓みを失ふ。従つて、「ウ」の明瞭度を増すには逆に、唇の兩端を引寄せて呼氣の放出口を減少することである。

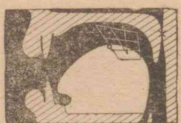
中母音 [ɨ]

音聲練習

ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ

一七 「エ」 音

エ音



「エ」の顎角は大體「イ」と「ア」との中間、又はそれよりも心持ち開いたのが標準音である。唇の開き並びに舌面の高さは、顎角につれて自然的に整へられるのが常である。従つて、よき「エ」は顎角の度合が一番大切である。もし顎角を開き過ぎるか、又は舌面を不自然に下げ過ぎると、いはゆる「甘へ聲」の「エ」(ɛ)に變はる。「エ」は本來短直な輕快な感じのする音であるが、開き過ぎた「エ」(ɛ)は鈍重な感じのする音である。

「エ」は屢々二重母音「エイ」となるが、實際の發音では[ɛ]の長音[ɛ:]で

[ɛ] 甘へ聲

二重母音

[e:]
[ɛ:]

代用されることが多い。例へば「綺麗」[kirei] > [kire:ɔ̄], 「英語」[eiŋgo] > [e:ŋgo], 「兵營」[heiei] > [he:ɛ:ɔ̄], 「敬禮」[keirei] > [ke:re:ɔ̄] 等。

「エ」を特に明瞭に聴かせるためには、下唇の取除きを行ふことと、長音を避けて短直に發することが肝要である。

音

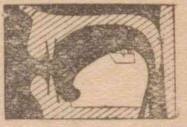
エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ
ア	エ	ウ	ア	エ	ウ	ア	エ	ウ	ア	エ	ウ

十八 「オ」 音

「オ」の顎角の開きは「ウ」と「ア」との中間であるが、前母音の「エ」よりは開いて居て [ɔ̄] の角度と凡そ同じである。唇の形は一見した所は圓い。しかし、わざとらしく丸めるのではなく、寧ろ「ウ」の構へ方で

呼氣の出口を大きくしたといふ形である。

「オ」の唇の外形は「ア」よりも「ウ」に近い。しかるに音色から言ふと、反對に「ア」の方へ近く、電話その他の實地聴取によれば、「オ」は「ウ」よりも「ア」の方へ紛れる。之は主として舌面の位置が「ウ」よりも「ア」へ近いことを示すものである。



第 20 圖



それで、「オ」を明瞭に發するためには、出来るだけ「ア」から離れた「オ」を出すやうにしなければならぬ。それには唇の開きは小さいめにして、「ウ」の形に近づけるやうにし、他方では舌筋を全體的に奥まらせることが肝要である。

「オ」は他の母音と組合ふと、單音節化して二重母音となる。第一は「オ」と「ウ」で「オウ」の場合で、例へば「酔ふ」[jomu], 「誘ふ」[sasomu], 第二は「オ」と「イ」で「オイ」の場合で、例へば「來す」[kou], 「毒す」[aou], 第三は「オ」と「エ」で

二重母音

59
119

長母音化

[o:] [o:]

オエの場合で、例へば「聲」[koe]、「吠える」[hoerim]などである。

二重母音「オウ」は屢々長母音化されて「オー」となる。前例で言へば [jom] は [jo:]、[sasom] は [saso:] である。又「オイ」は別途に「オーイ」の形のものがある。例へば「遠い」[to:i]、「用意」[jo:i] は之である。

音聲練習

オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ

第六章 ア行各音

40

子音の特質

第七章 子音概説

一九 子音の特質

子音は有聲音(こゑ)又は無聲音(いき)を以て調音される。口腔では上顎所屬の部分と下顎所屬の部分とが接觸又は接迫して、呼氣の放出に障礙を與へるから、それぞれ特有の「ひびき」を發する。従つて、音波も母音に比べると複雑であつて、特異の形狀に富み、その聽覺的印象は餘り快いものではない。即ち子音は音響學でいふ「噪音」又は「おと」に屬する。

子音の分類

二〇 子音の分類

子音の分類には三つの見地がある。第一は聲帶の振動の有無

第七章 子音概説

41

59
119

から見た分け方で、「有聲音」「無聲音」は之である。第二は口腔内の調音箇所による分け方で、「兩唇音」「齒音」「齒莖音」「硬口蓋音」「軟口蓋音」「聲門音」は之である。第三は呼氣の放出様式に基く分け方で、「破裂音」「通鼻音」「摩擦音」「破擦音」「彈音」は之である。これらの項目に従

つて、國語の標準音に現はれる子音を分類すると上表の如くである。

左に分類項目の用語を略説する。

兩唇音 上下の唇の主体として内側の端を用ひて發する音である。兩唇が狹窄して摩擦を生ぜしめ

標準國語の子音分類表

	兩唇音	齒音	齒莖音	硬口蓋音	軟口蓋音	聲門音
破裂音	p		t		k	
有聲破裂音	b		d		g	
通鼻音						
無聲通鼻音	m		n ɲ		ŋ	
有聲通鼻音						
摩擦音	f	s	ʃ	ç		h
有聲摩擦音	w	z	ʒ	j		
無聲摩擦音		ts	tʃ			
有聲摩擦音		dz	dʒ			
彈音						
無聲彈音						
有聲彈音			ɾ			

第 21 圖

る場合と密閉した上で呼氣を破出せしめる場合と、單に閉塞の役目をする場合とがある。

齒音 嚴密に言へば「舌齒音」であるが「舌」は他にも共通して用ひられるから、上顎の名稱だけを取上げたのである。音聲學で問題にする「齒」とは普通、上の前齒だけを指す。「齒音」も矢張りそれで、凡そ上の門齒の内側又は齒先に呼氣を摩擦させる音である。

齒莖音 詳しくは「舌先」と「齒莖」との協力による音である。齒莖とは大體、上門齒の齒齦のふくらみ、それも勿論内側だけを指すのである。ここでは破裂や摩擦の音を初め諸種の音が多く調音される。

硬口蓋音 「前舌」又は「中舌」と「硬口蓋」との間に作り出される音である。硬口蓋とは齒莖の膨らみ全部を除いた上顎骨の部分である。ここは範圍の廣い割に調音の種類は少く、それも少數の摩擦音だけである。

軟口蓋音 「奥舌」と「軟口蓋」との間に調音せられる音である。軟口蓋は柔かい筋肉であるから、調音に當つては相對的に動體として參加する。ここでは少數の破裂音閉塞音などが調音される。

齒音
齒莖音
硬口蓋音
軟口蓋音

59
19

聲門音

別に「喉頭音」とも呼ぶ。聲門の全開放における呼氣の摩擦又は聲門密閉における急開放によつて起る音である。

破裂音

或箇所が一度密閉して放出される呼氣を遮斷し(1)次でその内部に呼氣が充満し(2)次で密閉が破れて呼氣が放出される(3)といふ三階梯を踏むのが單獨に發せられる場合の破裂音である。しかしこの内の一つ乃至二つの階梯は前後に連る音の構へ方の影響で省略されることがある。國語音の破裂は「唇と唇」「舌と齒莖」「舌と軟口蓋」の三種である。

通鼻音

これは破裂音の起るのと大體同じ位置において口腔を閉塞して呼氣を鼻腔に放出する音である。その音色は極めて母音に近い。

摩擦音

これは呼氣の通路が著しく狭められるために起る呼氣と周壁との摩擦、謂はば軋みの音である。破裂音の如く瞬間的でないから別名「續音」の稱もある。

破擦音

或摩擦音が最初から固有の狭窄した呼氣通路を作ることなく發音の初頭に調音點の接觸即ち破裂の性質を帯びた場合の音である。破擦音は單なる「破音」+「擦音」ではなく、兩者の中間に新たな一調音點を占

有する。

彈音

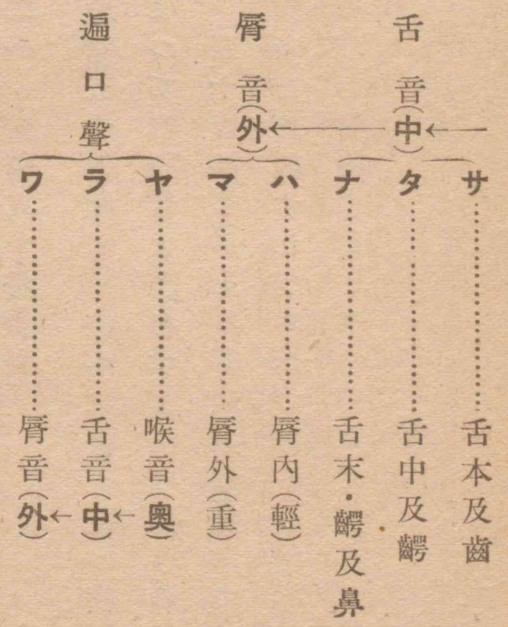
これは舌先を齒莖に向つて弾かせる調音法に準じて興へられた名稱である。呼氣から見ると破裂的な動きもするし、摩擦的な流れもする。標準音では舌を一度弾くが方言音には數回連続して弾くものもある。

所謂「五十音圖表」

二一 所謂「五十音圖表」

所謂「五十音圖表」は僅かに縦五段・横十列の小表ではあるが、之によつて國語音を理會する上の種々の便宜を索めることが出来る。「五十音圖表」がその學理上、悉曇章の字母表と關聯のあることは兩者を比較すれば明かであるが、現存せる「五十音圖表」十列の排列原理を解説すると次のやうである。

喉	音(奥)	ア	……………	喉内
一	カ	……………	……………	喉の外方・牙



『五十音圖表』は左向の顔を假想すれば、その「奥」から「外」へ順次進んで行つたものであることがわかる。この音圖製作當時「ア」カ行を喉音と呼んだのは適確でないとしても、大體において調音點の「奥部」を認めた點は妥當である。「サ」「タ」「ナ」行を舌音と斷じて、「中部」に置き、「ハ」「マ」行を唇音と判じて、「外部」に据ゑた點は全く合理的である。

但し「ハ」行が喉音とされなかつたのは、當時の音が今日と違つて兩唇摩擦音[F]を子音としてゐた事を物語るものと想はれる。「ヤ」「ラ」「ワ」各行は、その觀念稍曖昧ではあるが、別途に「遍口聲」といふ一群を樹てたために、新に「喉音」「舌音」「唇音」を起して同じく「奥中」外」の順位を守ることとなつたものと想はれる。

この『五十音圖表』は單なる字母表とも、或は當時を満足させた音圖とも解されるが、少くとも今日の音圖としての要求には不充分である。順列そのものは、上述の如き解釋の下に一應肯定され得るし、更に久しきに亙つての使用慣習は動かし難い強味さへ附け加へてゐる。けれども、いはゆる「濁音」「半濁音」「拗音」その他「現代音」などで音圖に洩れたものは、悉く之を追補して現代の需めに應じなければならぬこと勿論である。

「ア」行は既に母音の章に論じたから、次章よりは「子音」の名におい

19
19

熟音

て「カ」行以下を點檢するのであるが、之らは孰れも「子音」+「母音」の形式であるから一名熟音と呼ばれるものである。即ち、研究としては「子音」を手蔓として、それら一切の熟音關係を眺めて行くのである。

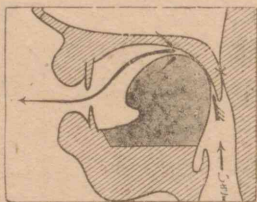
第七章 子音概説

第八章 カ行各音

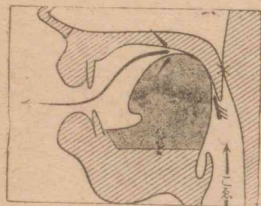
「カ」
「ガ」
各行

「k」
「g」
「ŋ」

二二 「カ」「ガ」「ガ」各行



第 22 圖 [k] 音



第 23 圖 [g] 音

通常「カ」行と呼ばれる音には「カ」「ガ」「ガ」三行が相互關係をもつ。之らの熟音に含む子音は [k] [g] [ŋ] である。共に「軟口蓋」と「奥舌」との調音であるが、[k] [g] は接觸して破裂音となり、[ŋ] は閉塞して通鼻音となる。又、[k] は無聲音であるが、[g] と [ŋ] とは有聲音である。

之らの破裂音は接觸面が移動すると、音色が變はる。國語の標準音では奥舌が殆ど自然の姿勢で浮び上つた位置であるが、少し奥まると例へば

第八章 カ行各音

魚骨が軟口蓋に刺さつた時に出るやうな音になる。反對に接觸

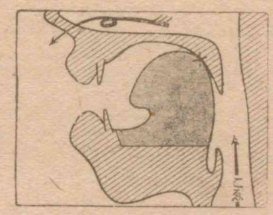
面が前進すると、よく東北人などが發するやうに、

「ク」が「キ」に近い音色となる。

英語やフランス語のは國語の音に近く記號[k] [g]を用

ひ、ドイツ語のは奥まつてゐるから記號[q] [g]で區別し、ベ

ンガリ語のは前進して居り記號[c] [j]が當てられる。



第 24 圖 [ŋ] 音

[o] [q]
[ɟ] [g]

濁音
清音

[k]はカキケケコの子音、[g]はガギグゲゴの子音、[ŋ]はガギグゲゴの子音である。從來カ行は清音と呼ばれ、ガ行とカ行とは無區別に濁音と呼ばれて來た。標準發音では大體、語頭に破裂音ガ行を、語中及び語尾に通鼻音ガ行を用ひることになつてゐる。例へば、語頭では「ガツコー」(學校)、「ゴハン」(御飯)語中では「カガミ」(鏡)、「コギレ」(小切れ)語尾では「ヤナギ」(柳)、「カグ」(家具)、「サンゲン」(三軒)、「ホコ」(保護)、「タマゴ」(卵)の如きである。但し、十分に熟してない熟語、例へば、ゼ

ンガイシヨ(前外相)、「セイヨ(西洋畫家)等は破裂音を維持してゐる。しかし九州地方その他では全く右の區別なく、全般的に破裂音である。

[ŋ]は又單獨には「ン」に當たるが、之は後に詳説する(第十七章参照)。

二三 「キヤ」「ギヤ」「ギヤ」各行

「カ」「ガ」「ガ」の各行は、その子音と母音との間へ半母音[j] (第十四章参照)を伴つて、いはゆる拗音を作る。「キヤ」「キユ」「キョ」「キヤ」「キユ」「キョ」「キヤ」「キユ」「キョ」(ja gju)「ギヤ」「ギユ」「ギョ」(nja njw)は之である。

拗音は一種の口蓋化作用で、子音の調音位置が幾らか硬口蓋の方向にずれたのである。又他方からいふと、子音と母音の間へ涉り音が挿入されて、調音點の移りをよくしたのである。その音感は短直ではないが、「聴え」の効果は増す。

口蓋化作用
涉り音
Glide

拗音
「キヤ」「ギヤ」
「ギヤ」各行

19

イ段及びエ段に拗音の無いのは、[j]の音色が[i][e]に近いため引立たないのに過ぎない。

「クワ」「グワ」
「クワ」「グワ」各音

二四 「クワ」「グワ」「クワ」「グワ」各音

「ク」「グ」「ク」に半母音[w]（第十六章参照）が割込むと「クワ」「グワ」
[kwa][gwa][ŋwa]が出来る。

唇音化

之らの音は一種の唇音化であるが、[w]が[j]の場合と同じく「涉り音」の働きをしてゐることに變りはない。この點從來の名稱「拗音」が「クワ」「グワ」「クワ」に及ばなかつたのは片手落であらう。

之らの音が「カ」「ガ」「ガ」各行の全段に現はれないのは、ワ行が[wa i we o]であるのと同理である（第十六章参照）。

「くわ」「ぐわ」は歴史的假名遣として現存し、音としても近畿・中國の一部・九州・四國の諸地方に活用されてゐる。しかし、標準音では

「くわ」「ぐわ」は一切短直の音「カ」「ガ」及び「ガ」で表現される。

音聲練習

カ	ガ	ガ	クワ	グワ	グワ
キ	ギ	ギ			
ク	グ	グ	ギユ	ギユ	
ケ	ゲ	ゲ			
コ	ゴ	ゴ	ギョ	ギョ	キョ
(ka ki ku ke ko)	(ga gi gu ge go)	(ka gi gu ge go)	(kja giu giu gio)	(gja giu giu gio)	(kja giu giu gio)

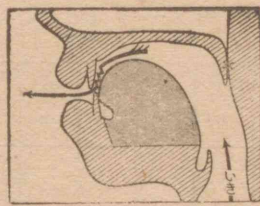
第九章 サ行各音

「サ」「ザ」各行

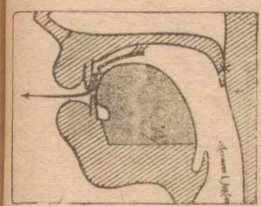
二五 「サ」「ザ」各行

齒音 [s] [z]

スー音



第 25 圖 [s] 音



第 26 圖 [z] 音

「サ」行と「ザ」行とは摩擦音の無聲有聲關係であるが、「サ」「ス」「セ」「ソ」「ザ」「ズ」「ゼ」「ゾ」の各四熟音の子音 [s] [z] は齒音であり、特に「シ」「ジ」の子音は次節で述べるやうに奥齒莖の音である。

齒音は上下の齒を軽く閉ぢ、舌尖を下の齒裏に接近させ、前舌と上の門齒裏との間に彎曲した通路を作つて、そこに摩擦を起させるのである。呼氣の使ひ方は寧ろ齒裏を吹きつける心持である。齒音はその音色の特徴から、一名スー音とも呼ばれる。

「シャ」「ジャ」各行

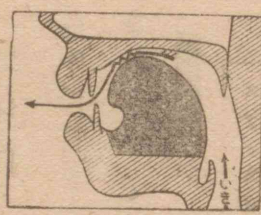
拗音

直音

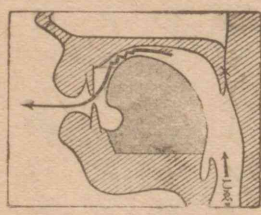
[s] [z]

[ʃ] [ʒ]

二六 「シャ」「ジャ」各行



第 27 圖 [ʃ] 音



第 28 圖 [ʒ] 音

窄を作る。

「シャ」「ジャ」行は通常「サ」「ザ」行の拗音の如く思はれて居るが、拗音といふ觀念が前述の如く「口蓋化」とか「渉り」を内容とするものとすれば、「シャ」「ジャ」行は決して拗音ではなく直音である。

即ち、「シャ」「ジャ」の子音は齒音 [s] [z] 又はその口蓋化音 [ʃ] [ʒ] ではなく、更に「渉り音」 [j] を要件ともしてゐない。之は全然別の構へ方に基く奥齒莖の摩擦音 [ʃ] [ʒ] である。 [ʃ] [ʒ] においては、舌尖は齒裏から引離され、前舌又は「中舌」が奥齒莖に接近して狭

サ行の熟音は實際の發音で時々移動されることがある。第一は「シ」が調音點の近い「ヒ」と相互に交代して「シク」が「ヒク」となり、反對に「ヒトツ」が「シトツ」となるやうな場合である。第二は「シュ」が發音の容易な「シ」に移つて「シュコー」が「シコー」・「ウンテンシ」が「ウンテンシ」となるやうな場合である。

又「シ」(ji)・「ジ」(zi)は東北地方や雲伯地方では、子音を取替へ同時に「中母音」を附けて [si] [zi] の如くし、「ス」「ズ」も「中母音」を添へて [sü] [zü] とされる。

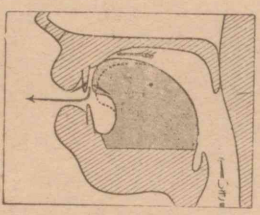
音聲練習

ジャ	ズア	シヤ	スア
ジ	ズイ	シ	スイ
ジュ	ズ	シュ	ス
ジエ	ズエ	シエ	スエ
ジオ	ズオ	シオ	スオ
(ja)	(za)	(ja)	(sa)
(ji)	(zi)	(ji)	(si)
(ju)	(zu)	(ju)	(su)
(je)	(ze)	(je)	(se)
(jo)	(zo)	(jo)	(so)

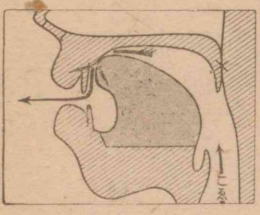
第十章 タ行各音

「タ」 「ト」 「ダ」 「テ」 「ド」

二七 「タ」「ト」「ダ」「テ」「ド」



第29圖 [t]音



第30圖 [d]音

破裂音 [t] [d]

「タ」「ト」「ダ」「テ」「ド」の子音は [t]、[d]、[da]、[de]、[do] の子音は [d] である。「チ」「ツ」・「ヂ」「ヅ」に之らの子音をあてた音 [ti] [tu] [di] [du] は外來音や方言音四國その他には在るが、今日の國語標準音にはない。

[t] と [d] とは無聲有聲關係で、共に「前舌」と「中齒莖」との接觸による破裂音である。破裂の瞬間には顎角が開いて、急に舌面が下がる。この移動が敏捷なほど、發音は明晰になる。

「チャ」「チヤ」各行

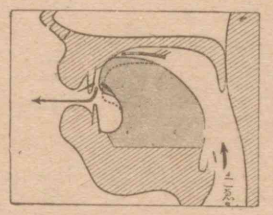
〔t〕

破擦音

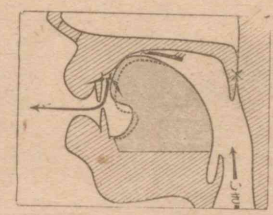
二八 「チャ」「チヤ」各行

「チャ」「チ」「チュ」「チェ」「チョ」の子音は無聲音〔t〕、「ヂヤ」「ヂ」「ヂュ」「ヂェ」「ヂョ」の子音は有聲音〔d〕である。共に破擦音で、摩擦音の始まる前に破裂運動が單獨の〔t〕〔d〕の時よりも奥まつた所に生じ、摩擦點は單獨の〔t〕〔d〕の時よりも前進した所に起こる。即ち、〔d〕は單なる二音の合併ではなく、全く固有の音聲單位である。

「チ」〔tʃ〕、「ヂ」〔dʃ〕は偶々々々、ダ行中に現はれるが、之らは〔ti〕〔テイ〕〔di〕〔デイ〕としてではなく、矢張り「チャ行」「チヤ行」の音價としてである。従つて、〔tʃ〕〔dʃ〕といふ獨立した語音を認める以上、「チャ行」「チヤ行」を「拗音」と呼ぶのは當らない。



第 32 圖 [tʃ] 音



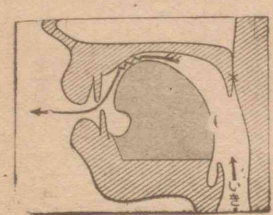
第 31 圖 [dʃ] 音

九州地方では「チ」〔tʃ〕と「ジ」〔ʒ〕に發音並びに聽取上の區別があるが、標準音ではその區別がなく、双方を混用するか、或は孰れかの一方が專用される。東京人には破擦音の方が多いやうである。

東北地方の「チ」は「ツ」に近く聽えるが、これは母音〔i〕が「中母音」〔i〕又は〔ü〕に外れるのに伴つて、強い破擦音〔tʃ〕が弱い破擦音〔ts〕に近い音で置換へられたものと思はれる。

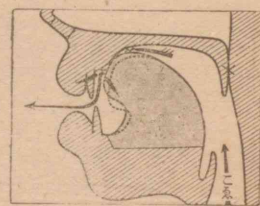
二九 「ツア」「ツイ」「ツエ」「ツオ」「ツア」「ツイ」「ツエ」「ツオ」

「ツア」「ツイ」「ツエ」「ツオ」の子音は無聲音〔ts〕、「ツア」「ツイ」「ツエ」「ツオ」の子音は有聲音〔dʒ〕で、共に破擦音である。その破裂位置は、單獨の〔t〕〔d〕の時よりも前進して居り、單獨の〔s〕〔z〕の時よりも奥まつてゐる。その構へ方は前項の〔tʃ〕〔dʃ〕と同様に、摩擦の始



第 33 圖 [ts] 音

「ツア」「ツイ」
「ツオ」「ツエ」
「ツア」「ツイ」
「ツオ」「ツエ」
破擦音



第 34 圖 [ɕ] 音

まる前に舌面の閉塞が伴ふもの、逆に言へば破裂後の舌筋の離隔が鈍くて摩擦を伴ふものといふ事になる。

「ツ」[tsu]「ツ」[ɕu]は偶々タ・ダ行中に現はれるが、その音は [m] [tɕ] [mp] [dɕ] としてではなく、ツア行・ヅア行の音價としてである。

九州地方では「チ」「ジ」の場合と同様に「ツ」[ɕu]とズ [zu]に發音並びに聴取上の區別があるが、標準音ではその區別がない。東京人には破擦音 [ɕu]の方が多いやうである。

ツア行・ヅア行は「ツ」を除くと標準語法として記述に用ひられる事は稀であるが、實際の發音では標準音にも方言音にも外來音にも屢々現はれる。例へば「ネツアイ」(熱愛) [sa]「アツィー」(暑) [tsi]「サツエー」(撮影) [se]「ロツツォーサマ」(御馳走様) [so]等。

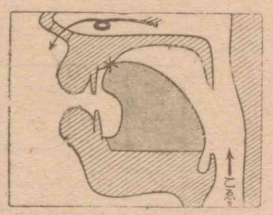
音價表

ダ	ヂ	ヂャ	ツア	ヅア
テイ	チ	チャ	ツイ	ズイ
トゥ	チュ	チュャ	ツ	ズ
テ	チェ	チェャ	ツエ	ズエ
ト	チョ	チョャ	ツオ	ズオ
(a ti tu te to)	(ɕa ɕi ɕu ɕe ɕo)	(ɕa ɕi ɕu ɕe ɕo)	(tsa tsi tsu tse tso)	(da di du de do)

第十一章 ナ行各音

「ナ」行

三〇 「ナ」行



第 35 圖 [n] 音

「ナ」「ニ」「ヌ」「ネ」「ノ」の子音は有聲音 [n] である。 [n] は「前舌」と「中齒莖」との接觸、實は舌の側面全部も上顎に接して口蓋の奥部を袋のやうにする事によつて完全に閉塞する。

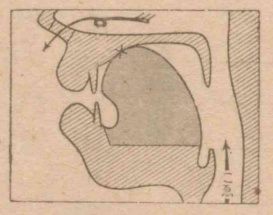
そこで呼氣は垂下した軟口蓋の上を通り、鼻腔に共鳴音を起して放出されるのである。この意味において、[n] は通鼻音であり、開放音であり、又續音でもある。その調音は短音にも長音にも發し得、その音色は樂音的で母音に近い。

[n] は別に單獨に發せられると「ン」音の一種をなすが、之はその章

通鼻音

で述べる(第十七章参照)。

三一 「ニヤ」「ニユ」「ニョ」「ニエ」



第 36 圖 [n] 音

「ニヤ」「ニユ」「ニョ」の子音は有聲音 [n] である。 [n] は前舌閉塞の通鼻子音といふ點では [n] の構へ方と共通するが、閉塞の位置が全然違ふ。 [n] の閉塞は「前舌」又は「中舌」が「奥齒莖」又は「硬口蓋」に接觸する。その範囲は廣いが、その割に知覺される音色の相

違は分明でない。

從來 [n] を [ŋ] の顎化の如く觀る人も多かつたが、國際音聲學協會では顎化作用とは主調音點を變へないで副調音點を口蓋の方向に發生するものとし、主調音點が全然移動するものを獨立の顎音とした。 [ŋ] でいへば舌先の接觸の上へ舌背の狭窄を加へる音 [ŋ] が [n] に對する顎化音であり、

顎化作用
顎音
顎化音

舌先を遊離して舌背で新たに調音する[n]は別箇の「顎音」なのである。

「ニャ」「ニョ」「ニヨ」は「ハンニャ」(磐若・シンニュー)、「シ」・「シンニヨ」(眞如)などの外談話音として「イチンチ」(一日)、「ニチニチ」(日々)などに現はれる。「n」は單獨には「ン」の働きもする(第十七章参照)。

「ニ」と「ネ」とは子音[n]との組合せにおいて前項に出たが、[n]との組合せが無いわけではない。ただ[ni]と[ni]・[ne]と[ne]の相違は知覺的に[si]と[ʃi]・[se]と[ʃe]の區別ほどの明瞭さが無いまでである。

音替練習

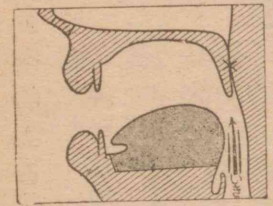
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	(na ni nu ne no)
ニャ	ニョ	ニヨ	(nya nyo nyo)		

第十二章 ハ行各音

「ハ」行

三三二 「ハ」行

一般的にいふと、ハ行の音は發音の様式又は呼氣の構へ方によつて多少の移動が現はれる。けれども、各音を單獨に發した場合の特質から観ると、「ハ」「ヘ」「ホ」の子音は喉音[h]であり、「ヒ」の子音は口蓋音[c]であり、「フ」の子音は兩唇摩擦音[f]である。



第37圖 (h)音

喉音[h]は聲門及び口腔の自由開放によつて發せられる無聲音で、別名氣音とも呼ばれる。本來は單なる「いき」であるが、その壓力に應じて咽腔壁に摩擦の音が生じる。かの哄笑する時の「ハハ……」「ヘヘ……」「ホホ……」は、之らの熟音の強く發せられた

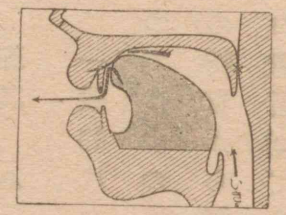
ものに當る。

[b]

[h]の有聲音[b]は語中で前後關係の音によつて起ることもあり、方言音の中に聴くこともあるが、標準音としては一般的でない。

[ha][he][ho]は疎慢に發せられると、氣音が減じて[ʰa][ʰe][ʰo]の如くなり、更に進めば單なる母音[a][e][o]になつてしまふ傾向がある。

口蓋音 [ç]



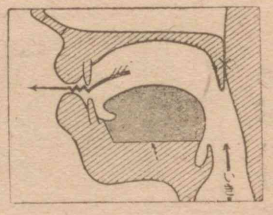
第 38 圖 [ç] 音

口蓋音 [ç] は「中舌」を「硬口蓋」の中央に接近させて生ずる稍弱い摩擦音である。之は無聲音で發せられるが、同じ構への有聲音は後に述べる「ヤ行」の子音 [j] (第十四章参照) である。[ç] は母音では [i] の構へに近く、子音では [j] の構へに近い。それで聴取の方では「ヒ」と「イ・ヒ」と「シ」は屢々聴き誤られる。東京では發音に當つても「ヒ」は殆ど例外なく「シ」に誤られる。[ç] の發音に際して、中舌と硬口蓋との狹窄が不足する時は、前述

の「ハ」「ホ」の子音と同じ構へになつて喉音の [h] となる。

兩唇摩擦音

[f]



第 39 圖 [f] 音

兩唇摩擦音 [f] は兩唇が狹窄され、その間を呼氣が摩擦して流出する音で、古來ハ行が唇音と呼ばれた名残りを留めてある音である。しかし、嚴密にいふと、呼氣の大部分は上齒の裏側に吹きつけられ、摩擦は上の齒先が起すことが多い。

理論上、[f] の有聲音は矢張り兩唇摩擦音の [ʋ] であるべき筈であるが、實際活用されてゐる所は、次項に説く兩唇破裂音 [b] が當用されてゐる。即ち「フ」の濁音が「ブ」と稱せられる所以である。

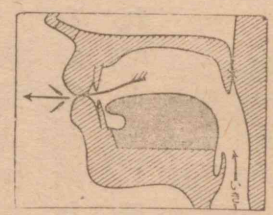
假名文字の「ふ」が何時も兩唇音 [f] を當てがはれてゐるかどうかは別問題である。ただ、孤立した場合とか丁寧な發音における「ふ」は「[f]」であるから、教育の基本型としては之を推してよい。

基本型

「バ」「バ」各行

兩唇破裂音

三三 「バ」「バ」各行

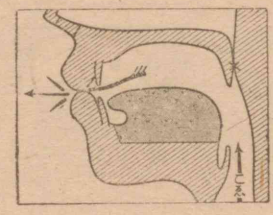


第 40 圖 [p] 音

「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」の子音は無聲音 [p] で「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」の子音は有聲音 [b] で、共に兩唇破裂音である。 [p] [b] 兩音は次章の [m] と共に最も調音の容易な音といはれるだけあつて、幼児の音聲としても最も早くから現はれる。

閉塞された兩唇が、含氣によつて破られるのであるが、その際は全く唇だけの動きで、顎角に影響はない。舌も自然のままである。

半濁音・濁音



第 41 圖 [b] 音

古來、バ行を半濁音、バ行を濁音と稱へたのは、清音と呼ぶハ行を基準にしての文字の形式から來た觀念であつて、音聲上の關係は認められない。即ち以前は、全濁に文字「バ」、半濁に「バ」を用ひた。

「ビヤ」「ビユ」「ビョ」「ビャ」「ビュ」「ビョ」「ビャ」「ビユ」「ビョ」

三四 「ビヤ」「ビユ」「ビョ」「ビャ」「ビュ」「ビョ」「ビャ」「ビユ」「ビョ」

半母音 [j] を挿んで「涉り音」をなすもの、いはゆる「拗音」は、ハ行關係の行に三通りある。第一はハ行中の [ç] を頭音とした「ビャ」「ビュ」「ビョ」で、第二はバ行の [p] を頭音とした「ビャ」「ビュ」「ビョ」で、第三はバ行の [b] を頭音とした「ビャ」「ビュ」「ビョ」である。

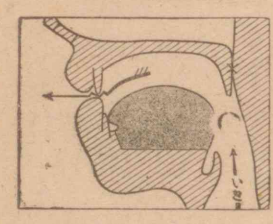
「フア」「フイ」「フエ」「フオ」「ヴァ」「ヴァイ」「ヴェ」「ヴォ」

三五 「フア」「フイ」「フエ」「フオ」「ヴァ」「ヴァイ」「ヴェ」「ヴォ」

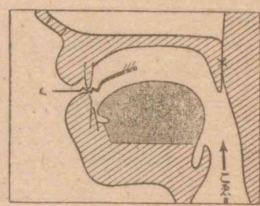
前述の兩唇擦音 [f] [v] の調音に近似して唇齒擦音 [f] [v] がある。 [f] は無聲音で「フア」「フイ」「フエ」「フオ」の子音であり、 [v] は有聲音で「ヴァ」「ヴァイ」「ヴェ」「ヴォ」の子音である。

唇齒擦音とは「下唇」を「上齒」に接近させて、その間

唇齒擦音



第 42 圖 [f] 音



第43圖 [v]音

隙を通路として出て行く呼氣の摩擦音である。舌は自然の位置にあるままでよい。

この兩行は直ちに標準音とは言へないかも知れないが、その内の或ものは方言音として古來より用ひられ、例へば「ヒ」は「フイ」と發音されなどして來た。更に國語化した外來語の多い現代では、[f] [v]は既に新興國語の標準音の域に入つたものと解してもよい。例へば「エツフェル塔」「アスファルト」などは國定讀本中にも現はれ、「ジュネーヴ」「ソヴィエツト」などは官報中に屢々記録され、その他日々の新聞雜誌小説科學書等に用ひられる所は枚舉に遑のない程である。

音聲練習

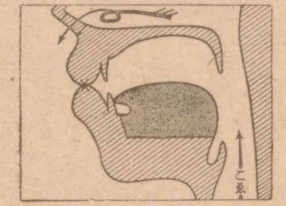
ハ	ハ	ハ
ヒ	ビ	バ
フ	ブ	プ
ヘ	ベ	ペ
ホ	ポ	ボ
(ha çi ru he ho)	(pa pi pu pe po)	(ba bi bu be bo)

ヒヤ	ビヤ	フヤ	ヴァ
			ヴィ
ヒユ	ビユ	フ	ヴ
			ヴェ
ヒョ	ビョ	フォ	ヴォ
(çja çju çjo)	(bja bjur bjo)	(fa fu fo)	(va vi vu ve vo)

第十三章 マ行各音

第十三章 マ行各音

「マ」行
三六 「マ」行



第 41 圖 [m] 音

「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」の子音は兩唇閉塞の通鼻音 [m] である。この音は兩唇破裂音 [p] [b] と同じ調音箇所て閉塞して、呼氣を鼻腔に放出する。口腔の最も外部で閉塞されるため、共鳴域の容積は大きさにおいて第一位である。舌は自然のままに納まつてゐる。

[m] は長音 [m:] として用ひられる場合も多く、その際は文字「う」が使はれてゐる。例へば「うま」(馬) は [m:a] であり、「うめ」(梅) は [m:e] であり、「うまい」(美味い) は [m:ai] である。

[m] は又、いはゆる撥音の「ン」の一種として働く(第十七章参照)。

撥音
「ム」
「ミ」
「マ」

三七 「シヤ」「シユ」「シヨ」「シヅ」

いはゆる「拗音」の「シヤ」「シユ」「シヨ」は、「マ」「ム」「モ」に「涉り音」として、半母音 [j] が挿入されたものである。兩唇音 [p] [b] の場合と同様に、[m] はいはゆる拗音化に合つても、口蓋化される事がない。つまり、それだけ調音に特異性をもつた音と見ることが出来る。

マ	ミ	ム	メ	モ
ミヤ	ミユ		ミョ	
(ma)	(mi)	(mu)	(me)	(mo)
mja	mju		mjo	

第十三章 マ行各音

第十四章 ヤ行各音

第十四章 ヤ行各音

「ヤ」「ユ」「ヨ」

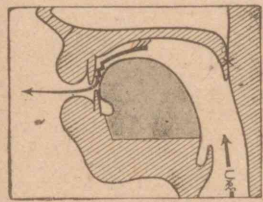
三八 「ヤ」「ユ」「ヨ」

ヤ行においては「ヤ」「ユ」「ヨ」の三熟音だけが半母音[j]を執るのが、今日の標準發音である。即ち「奥母音」と組合つた[ja][ju][jo]だけが現存し、「前母音」と組む[ji][je]は實際上ア行の[i][e]に攝取された形である。これは前母音の調音點が[j]に近く、聽覺上も音色の特色に疎い證左である。

[j]は前述の[c]と同じく、中舌と「硬口蓋」との接近に基く弱い摩擦音である。[j]は母音[i]の幾分か閉ぢられた音で、母音的音色を少からず帯びてゐる。これ半母音とも半子音とも名付けられる所

半母音・半子音

[j]



第 45 圖 [j] 音

以である。

[j]は「涉り音」として二つの母音の間に挿入されると、音節を切つて二重母音化を避けしめて、兩母音の音色を鮮かにする。例へば「しあはせ」は「[i:jawase]」「しあゝ」は「[i:ja]」となる。又、「拗音」では子音と母音の間に挿入されてその熟音に迂曲な感じを與へるが、同時に「聽え」をよくする。

音節練習

ヤ
ユ
ヨ
(ja)
ju
jo

涉り音

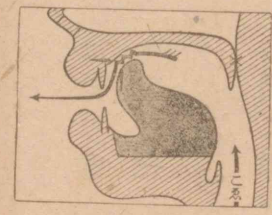
第十五章 ラ行各音

ラ行

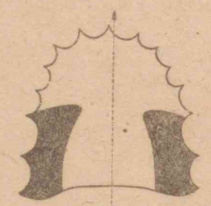
三九 「ラ」行

「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」に含む子音は、國語特有の音といはれる弾音 [r] である。記號 [r] は [l] と [r] との合字として案出されたのであるが、その調音方法としても二者の特徴と共通する所が認められる。

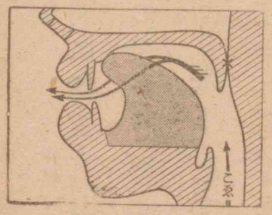
[r] は英語などに現はれるやうに、舌尖が硬口蓋に向つて反り上り、その



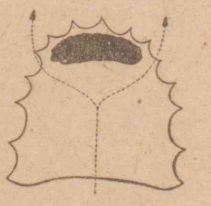
第 46 圖



第 47 圖

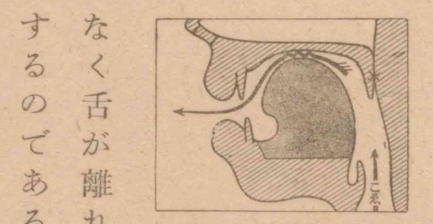


第 48 圖



第 49 圖

間隙を呼氣が流れ出る摩擦音第46圖である。之に對して [l] は矢張り英語などに現はれる音で、舌尖が齒莖に接觸する。それで呼氣は舌の兩側に分れて流出する(第48圖)。本質は摩擦であるが、通路の特徴から、側音又は「兩側音」と呼ばれる。(第47圖と第49圖は、[r] と [l] における舌面と口蓋の接觸點を比較した「バラストグラム」口蓋圖で、矢は呼氣の流出路を示す。)



第 50 圖 [r] 音

[r] においては、最初に [r] の如き構へをした時に既に呼氣を放出し初めるから「ウ」に似た音が先立つ。次いで、舌尖を弾いて齒莖へ一度打ちつける。すると、その接觸した瞬間が [l] に類する構へ方であるから、呼氣は舌の兩側から流れ初めるが、間もなく舌が離れるため側音は中斷して、呼氣は中央から力なく流出するのである。

[r] は一度弾くのが原則であるが、二・三度振動させて弾くと、卷舌

卷舌

[r]

又は俗にいふ「ベラムメー口調」の「ラ」[r]といふ不快な音が出る。

ラ行の音は時々同じ有聲のダ行と紛れ例へば幼児の「ラッバ」が「ダッバ」、「ロソク」が「ドソク」などとなる事がある。これは偶々[t]と[d]との舌先の接觸點が共通してゐる所へもつて[t]の弾き方が足りない事によるのである。

「リヤ」「リュ」「リョ」

四〇 「リヤ」「リュ」「リョ」

ラ行も他の行と同様に、奥母音[a][o]を伴ふ時にだけ、「涉り音」[j]を取入れて、所謂「拗音」「リヤ」「リュ」「リョ」を作る。

音辨練習

ラ	リ	ル	レ	ロ
リヤ	リュ	リョ	(tja)	(tju)
			(tjo)	

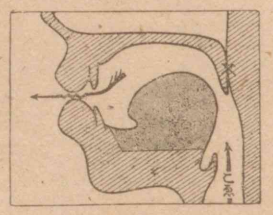
第十六章 ワ 行

[w]

四一 「ワ」

今日の標準發音では、ワ行中で子音をもつものは「ワ」だけである。「キ」「ウ」「エ」「ヲ」も、或時代には矢張り子音をもつて、熟音であつたと想はれるが、今日ではア行の「イ」「ウ」「エ」「オ」と變りがない。

兩唇擦音[w]

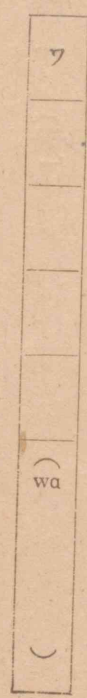


第 51 圖 [w] 音

「ワ」の子音は兩唇擦音の[w]である。兩唇に摩擦を起させる點は「フ」の子音[f]に似てゐるが、[f]においては舌位置が[p][b]同様に、自然のままであつた。しかるに[w]では、奥母音[u]よりも幾分奥まつた位置へ「奥舌」の持上げが起る。軟口蓋も垂れ下つて通路を、摩擦の生じない程度にまで狭める。

つまり、[w]は外部に「唇」、奥部に「軟口蓋」といふ二箇所の狭窄を生じる音である。この二箇所は、いはば母音「ウ」を強化した構へ方である。

[w]は[j]と同様に半母音であり、半子音である。従つて音感も母音的であり、又「涉り音」の役目も勤める。例へば「ニギアイ」が[nigisai]となり、「タアイ」は[tawai]となる如きである。但し、[k][g][ŋ]の如く[w]に近い調音點の音との組合せ、即ち「クワ」「グワ」「グワ」の如き音は、漸次退化しつつある。



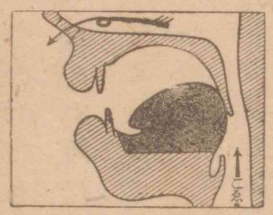
半母音・半子音

第十七章 ン 音

四二 「ン」

國語の「ン」には五種類ある。その内の四種は、既に述べて來た[m][n][ɲ]である。[m]は唇と唇、[n]は舌先と前齒莖、[ɲ]は前舌と奥齒莖、[ŋ]は奥舌と軟口蓋による閉塞の、それぞれ通鼻音である。そして、之らは「ン」の音として働く外に、それぞれ母音と組合つて、熟音をも構成する。

しかるに今、第五種の音は「ン」に専用せられて、最も屢々用ひられ、又國語特有の調音法といはれる[n̥]音である。この音は「軟口蓋の端部」と「奥舌の後部」との輕接觸による不完全通鼻音である。この



第 12 圖 [n] 音

通鼻音

[n̥]

接觸は無雑作に行はれ、時には懸壅垂が挿まれる事もあり、呼氣は多少口腔に洩れる事もあるが、之は却つて[m]に固有の音色を與へてゐるのである。

以上五種の「ン」の現はれるのは左に示すやうに、大體語音の前後關係によつて定まつてゐる。

- 1. [m]はその後へ [p] [b] [m] 音の孰れかを伴ふ場合、
例、「電報」[dempo:]、「二羽」[sanbo:]、「一生懸命」[sic kemme:]
- 2. [n]はその後へ [t] [d] [n] 音の孰れかを伴ふ場合、
例、「反對」[hantai:]、「船頭」[senjo:]、「三年」[san nen:]
- 3. [ŋ]はその後へ [ŋ] [ŋ] などの音を伴ふ場合、
例、「萬葉」[manyō:]、「天地」[tengu:]
- 4. [ŋ]はその後へ [k] [g] 音の孰れかを伴ふ場合、
例、「殿下」[denka:]、「前外相」[zenzai:]、「文學」[gaku:]
- 5. [ŋ]は右以外の子音を伴ふ場合、又は母音を伴ふ場合、
例、「天使」[tenshi:]、「本屋」[honja:]、「談話」[danwa:]、「汎愛」[hōnai:]、「本院」[honin:]、「天運」[tenun:]

同化

語詞の中では、以上の如く、隣接する音へ調音の同化(第四六節參照)を起し易いのが通鼻音の特質であるが、單獨の場合の多くは兩唇音 [m] 又は軟口蓋端音 [n] である。又、返事の時の音「フン」は [m] 或は [ŋm] である。

[ŋ] は他の通鼻音と同様に、母音的な所があつて樂音に近く「聽え」も母音に次いでよい。

國語の通鼻音は以上の五種だけであつて、その他の子音及び母音を鼻に抜く時は之を「通鼻音」とは呼ばず、鼻かけ音又は「鼻もつれ音」と稱し、教育上避くべき事になつてゐる。

音聲練習

ン				(m n ŋ ŋ a)
---	--	--	--	---------------

鼻かけ音 Nasal Twang

第十八章 連音

連音と意義

四三 連音と意義

「連音」とは二つ以上の語音が連發される状態をいふのであるが、その排列の順位や之に附隨する音聲の様姿は表現せんとする言葉の「意義」によつて定まる。「連發」といふのは呼氣を途切らないで發するの意で、その一群の音を息の段落又は「氣息群」と呼ぶ。例へば「オハヨウ」[ohajo:]「コンニチワ」[konjifwa]はそれぞれ連音であり、氣息群であるから、假令ゆつくり發しても息を途切る事はない。

息の段落
(氣息群)
Breath Group

語音

連ねられる音の個々は語音(又は單音)であるが、國語では既に或程度の大きさにまでこの語音が纏まりを遂げてゐる。即ち所謂「五十音」は之であつて、その中のア行五音及びン音を除く他はみな

熟音

「單音」ではない。それらは普通熟音と呼ばれる纏まりを成して居り、小さい「連音」である。

「熟音」中の或ものは、そのままの排列で或言葉の意義に通ずるものがある。例へば「ハ(ha)」とか「キ(ke)」とかはそれである。けれども斯ういふ事實は全くの偶然に過ぎない。それも單音の順列からだけ觀た場合の事であつて、嚴密に言へば「ハ」は「齒・葉」の孰れを指すのか、「キ」は「木・黄」の孰れを指すのか不明である。それらの判別は之を音聲化して「齒・木」ならは高調・葉・黄」ならは低調といふやうに音聲要件を帯びなければならぬ。

それはそれとして、茲で認められてよいのは「ha」なり「ke」なりといふ順列であつて、之が「E」とか「E」であつてはならないといふ事である。即ち「熟音」は直ちに更に大きい連音を構成する國語的な素材であるといふ事が出来る。

我々は單音の一つ一つを如何によく理會し練習しても、「意義」といふ大切な條件を心の中に浮べない限り、それらの單音を活用す

る事は出来ない。即ち「連音」と「意義」とは相関的存在である。

連音の要件

四四 連音の要件

前節に述べたやうに「連音」は必ず「意義」を豫定して存立する。この意義を左右する音聲的條件、即ち「連音」の要件は大體次の四項である。但し、之らの四項はそれぞれ單獨の絶對的條件ではなく、相互に聯關するものである。

音の斷續

1. 音の斷續

意義を背景として音の斷續が行はれることによつて、「息の段落」が生ずる。段落と段落との間は「休止」又は「ポーズ」である。休止は表現並びに陳述の形式(第廿五章参照)に基いて「大」「中」「小」に分れる。

休止(ポーズ)

〔例一〕

(イ) にはとりが(小休止)一(大休止)みます(鶏がみます)
(ロ) には一(中休止)とりが(小休止)一(大休止)みます(二羽、鳥がみます)

〔例二〕

(イ) には(中休止)一(小休止)にはとりが(小休止)一(大休止)みます(二羽、鶏がみます)
(ロ) には(中休止)には一(中休止)とりが(小休止)一(大休止)みます(庭には、鳥がみます)

斯く斷續は意義を決定するが、斷續は單獨に在るものではなく、必ず他の連音要件を隨伴してゐる。第四項の「音の高低」はその最も主要な要件である。

音の順位

2. 音の順位

「櫻」を意味する語ならば、その音に「サ」¹「ク」²「ラ」³の順位が要求される。この順位をどんなにでも變へたならば、よし三個の音は整つてゐても意義に聯合しなくなる。

又、語によつては音の順位を變更したために別個の意義を生ず

る事がある。他の要件を問題にしないで文字面だけでいふなら、ミセ↑セミ、バカ↓カバ、ナス↓スナの如きは逆順から生ずる別義である。語によつては偶然に双方から同じやうに讀めるものもある。例へばト_マト、ヤ_オヤ、シン_ブンシなどは之である。

國語の音聲順位は、語音の精度から「sa₁tu₂to₃」と觀てもよく、熟音の粗さから「サ₁ク₂ラ₃」と觀てもよい。けれども、逆順のテストによれば、心理的の單位が「熟音」に宿つてゐる事が肯ける。

3. 音の長短

音の長短を決する方法を大別すると「長母音化」と「長子音化」とである。「長子音化」は更に在來の觀念によれば、つまる音(促音)とはねる音(撥音)とに分れる。左に各々數例を擧げる。(發音記號中の[:]は長音を示す。)

(イ) 長母音化

- toka (都下) to:ka (十日)
- jomel (署名) jo:mel (證明)
- joko (横) jo:ko (洋行)

(ロ) 甲、長子音化(促音)

- maji (町) maj:i (寸燐)
- nata (鉞) nata (成つた)
- haka (墓) haka (薄荷)

(リ) 乙、長子音化(撥音)

- ama (尼) am:a (按摩)
- ana (穴) an:a (あんな)
- kana (假名) kan:a (鉤)

長短は、以上の如く、語義を全然變更するものの外に、陳述の度合を強めるもの、謂ひかへると誇張を加へるものがある。例へば、

音の長短
つまる音
はねる音

(イ) 長母音

- シロイ(白い) シロイイ(二層白い)
- ナガイ(長い) ナガイイ(二層長い)
- トリー(遠い) トリーイ(二層遠い)

(ロ) 甲、長子音(促音)

- サキ(先刻) サッキ(二層前に)
- アカイ(赤い) アッカイ(二層赤い)
- チイサイ(小さい) チッサイ(二層小さい)

(ロ) 乙、長子音(撥音)

- ミナ(皆) ミンナ(悉く皆)
- タビ(都度) タンビ(都度必ず)
- ヤワリ(柔かに) ヤンワリ(極く柔かに)

音の高低

4. 音の高低

連音に纏まりの力を與へるのは高低關係、即ちアクセントが附加されるからである。前出の例で言へば、「鶏」を意味するには「は」とり(低高低型)のアクセントを要し、「二羽鳥」の意ならば「は」とり(高低型と平型)でなければならぬ。又「居ます」は「あます」(低高低型)で纏められてゐる。

従つて、第二例は、

- (イ) には にはとりが るます
- (ロ) にはには とりが るます

となる。

その他、

- アキ(秋) と アキ(飽)
- アメ(雨) と アメ(館)
- ハシ(箸) と ハシ(橋)

のやうに連音に加へられる高低關係は、その語全體の音聲的形態となつて意義に連なる。

但し、高といひ、低といふも、その段落(氣息群)内での語音と語音との相對的高低關係であつて、音樂などといふ音の絶對値の高低ではない。

第十九章 連音の轉化 (上)

活語
Living Language

經濟化
明瞭化
個性化

長音化作用

連音の或ものは談話活動に用ひられてゐる内に、一つには生理的の理由と、又一つには心理的の理由も加はつて、その構成や順序に多かれ少かれ變化や轉置が行はれるものである。永い時代を経るうちに、自ら「文語」と「口語」が分れ、「中央語」と「地方語」などの別が生じたのも、蓋し活語の自然の現象といふべきであらう。

その轉化した跡を辿つて見ると、(一)調音運動の**經濟化**、(二)發音の**明瞭化**、(三)發音者の**個性化**などが行はれてゐる。之を實際について音聲學的に分類すると、大體次の四項となる。

四五 長音化作用

イ音便・ウ音便

促音便・撥音便

長母音化作用

長音化作用には二通りある。即ち「長母音化作用」と「長子音化作用」とである。前者はいはゆる「イ音便・ウ音便」と稱せられるもので、その多くは關西型の發音法(A第二類例)である。之に對し後者は「促音便・撥音便」と呼ばれるもので關東型である。

A. 長母音化作用

その第一類は、二重母音「エイ」「アイ」「アエ」が長音「エー」「アエー」に移るもの、第二類は二重母音「アイ」「アオ」「オウ」「オイ」が長音「オー」に移るものである。例へば、

第一類「エイ」→「エー」

綺麗—きれ— kirei > kire:

叮嚀—て—ね— teinei > te:ne:

敬禮—け—れ— keirei > ke:re:

同 「アイ」→「アエー」

咲いて—せ—て saite > se:te

焚いて—て—て taite > te:te

書いて—け—て kaite > ke:te

同 「アエー」→「アエー」

歸る—け—る kaeru > ke:ru

牙える—せ—る saeru > se:ru

絶える—て—る taeru > te:ru

第二類「アイ」→「オー」

買ひて—買—うて kaite > ko:te

這ひて—這—うて haite > ho:te

逢ひて—逢—うて aite > o:te

同 「アオ」→「オー」

仰ぐ—お—ぐ aogu > o:gu

長子音化作
用
促音・長子
音化
撥音・n音
化

扇ぐーおーぐ aonju > o:nju

同 「オウ」→「オー」

誘ふーさそー sasou > sas:o

通ふーかよー kajou > kaj:o

思ふーおもー omou > om:o

同 「オイ」→「オー」

問ひてー問うて toute > to:te

乞ひてー乞うて koute > ko:te

酔ひてー酔うて joute > jo:te

B、長子音化作

その第一類はいはゆる促音で音聲學的には長子音化[n]であり、第二類はいはゆる撥音で[n]音化に當る。前者は多く關東型の語法に現はれる齒切れよい發音法であり、後者は關東關西兩型に共

通して現はれる。

第一類「アイテ」→「アッテ」

買ひてー買つて kaite > kat:e

繩ひてー繩つて naite > nat:e

這ひてー這つて haite > hat:e

同 「オイテ」→「オッテ」

負ひてー負つて oite > ot:e

添ひてー添つて soite > sot:e

酔ひてー酔つて joute > jo:te

同 「リテ」→「ッテ」

取りてー取つて torite > tot:e

有りてー有つて drite > dr:e

釣りてー釣つて tsurite > tsur:e

同 「チテ」→「ツテ」

立ちて→立つて ta.jite ∨ tate

勝ちて→勝つて ka.jite ∨ kate

待ちて→待つて ma.jite ∨ mate

第二類「ミ(ビ)テ」→「ンデ」

編みて→編んで amite ∨ ande

飛びて→飛んで tobite ∨ tonde

住みて→住んで sumite ∨ sunde

〔附〕短音化作用

國語では極く稀に「とうふ」と「とふ」、「いっしょうけんめい」と「いっしょけんめ」の如く長母音が短化される事がある。

四六 同化作用

同化作用 Assimilation

短音化作用

前進同化 Progressive Assimilation
後退同化 Regressive Assimilation
相互同化 Reciprocal Assimilation
聲帯振動の有無の關係

連濁

同化作用とは或音が、その前又は後の音の影響を受けて、調音様式の或部分を前又は後の音と同じうする事をいふ。それで、前の音の影響を受ける場合を**前進同化**、後の音の影響を受ける場合を**後退同化**、又双方から影響し合つてゐる場合を**相互同化**と呼ぶ。今、國語で同化作用の起る場合を分類すると、次の六項である。

A. 聲帯振動の有無(有聲音、無聲音)の關係

通常、二つの語が連結されて熟語となる場合は、その第二の語の頭音が先行する語の尾音即ち母音の影響で有聲化される。いはゆる**連濁**は之で、一種の「**前進同化**」である。例へば、

手紙―てがみ te.kami ∨ tegami

雨戸―あまど ama.to ∨ amado

粉炭―こずみ ko.sumi ∨ kozumi

又、稀に「しらないことだ」「しらないこつた」などは、**無聲子音の強化**

(長子音化)に基く影響である。その他母音が前後の無聲子音の影響を受けて無聲母音となる事が屢々ある。例へば、

「月」[suuki], 「草」[kujasa] 「門」[kikw], 「敷」[jikw]
などは之である。

熟語の内でも既に第二語に濁音を有する時は語義を明瞭にしようとする發音心理から、同化作用が回避される。「むらすめ」「やまかご」「あさかぜ」の如き非連濁は之で一種の異化作用とも見られる。

B. 唇を用ひる音の關係

これは兩唇を用ひて調音する音の一群、即ち「p b m f w」及び時には「h g」等が互に同化し合ふ現象で、一名唇音同化(又は轉化)と呼ばれる。數例を挙げると、

淋しい — さみしい sabiji: > samiji:
あわたる — あはてる awateru > abateru

煙 — けむり keburi > kemuri

舌先を用ひる音の關係

C. 舌先を用ひる音の關係

調音にあたつて、舌先又はそれに近い所を用ひる音は、大きい家族關係をもつてゐて、いはゆる齒音同化(又は轉化)を起す。その一群は大體「t d n p s z ʃ r j d t s d t」である。この「齒音同化」は通常、方言又は訥音に現はれ、標準音の内には聞かない。例へば、

勿論 — もつろん mojiron > motsuron
叮寧 — ていれい teinei > teie:
事だ — ことだ kotoda > konda
五錢 — ごしえん gosen > gofen

D. 奥舌を用ひる音の關係

奥舌の調音による少數の音「k g n p」は、互に同化(又は轉化)を行ふ近親關係に在る。その最も普通の場合には「k」と「g」との交替であ

齒音同化 Assibiliation

奥舌を用ひる音の關係



るから、第一の有聲無聲の項にあたる。但し「ガ行が[g]と[n]とに互
ることは、この項の特徴である。例へば、

行軍—かうぐん ko:guwa > ko:ŋuwa
内外—ないがい naigai > naŋgai

鼻腔を用ひ
る音の關係

E. 鼻腔を用ひる音の關係

假名文字「ン」で表示する音は、鼻腔音「m n ɲ ŋ」を引くるめて代
表してゐるが、實際の連音においては後音の如何によつて、それぞ
れの音が現はれる(八二ページ参照)。この點において「ン」は「後退同
化」の代表的なものである。「m n ŋ」について、重ねてその例を一と
通り擧げると、

心配 jimpai 棧橋 sambaji 新米 jimmai
先端 sentan 診斷 jindan 殘念 zannea
三角 sanjakku 新樂譜 jingakufu 門限 monnen

母音の系列
的關係

F. 母音の系列的關係

前母音「i e a」奥母音「u o a」の諸音はそれぞれの系列内で關聯
し合ふことは、前述の長母音化の現象にも見られるが、更に次の如
く先行の母音の影響による同化も少くない。

できる—でける dekiwu > deke-wu
ほたる—ほたろ hotal-wu > hotal-o

又「小開き母音」の[i]と[u]とは互に交換される。例へば、

きびす—くびす kibisuw > kubjisuw
運轉手—うんてんし unteŋfju > unteŋji

更に母音は、それぞれの周圍に音族をもつてゐて、その代入が行
はれる。一斑を擧げると、「i—j i i—e—e—æ」「a—e—e—æ」「o
—ö—u—ü—w」の如きである。例へば、

かゆ(粥)—かい kajuw > kajji う(魚)—うお usuo > uö

第二十章 連音の轉化(下)

脱落作用
Eclipsis

四七 脱落作用

脱落作用は、(一)音節の脱落、(二)子音の脱落、(三)母音の脱落、と三つに分けて観ることが便利である。いづれも調音の自然から出た經濟化の作用である。

A、音節の脱落

二語が結合した場合、先行・後續の兩音節が偶然同じであつた場合とか、音節が餘りに多すぎる場合とかに、差支の少ない方の一音節を抜き捨てて語呂を合せる。

川原—かはら *ka-wa-ha-ra* > *ka-wa-ra*
青柳—あをやぎ *ao-ya-na-gi* > *ao-ya-gi*

文箱—ふばこ *Fu-mi-ba-ko* > *Fu-ba-ko*

又、次のは熟音ではないが、一音節の働きをしてゐる母音である。

鳴海—なるみ *na-ri-u-mi* > *na-ru-mi*
長雨—ながめ *na-ga-me* > *na-ga-me*
陸奥—みちのく *mi-ji-no-oku* > *mi-ji-no-ku*

「ん」は母音と同様一音節の働きをするが、「ひんがし—ひがし」だいいん—だいこの如く、これも屢々脱落の内に加はる。

B、子音の脱落

「子音の脱落」は要するに「熟音の頭」の脱落である。その最も多い場合は、「キ」「ク」が「イ」「ウ」になり、「シ」が「イ」になる時である。次の例は [i] の前の [k] [g] が脱落する時である。

開きて—開いて *ki-akite* > *ki-ai-te*
蒔きて—蒔いて *ma-ki-te* > *ma-ai-te*

子音の脱落

脱ぎて―脱いで *nuqite* > *nuide*

次の例は[w]の前の[k]が脱落する場合で、[j]と長音化の[w]に挟まれた[i]も脱落する。

美しく―美しう *utsukuwjiku* > *utsukuwju:*

貧しく―貧しう *maduwjiku* > *maduwju:*

宜しく―宜しう *johojiku* > *johofju:*

次の例は[i]の前の[j]が脱落する場合、

負かして―負かいて *makajite* > *makate*

謂はして―謂はいて *iwajite* > *iwante*

以上は關西型の言葉に廣く行はれてゐる脱落である。

一般的に發音の困難な[h]は、特に[i]又は[e]と組合つた場合に屢々脱落するか、又は通鼻音[n]と入り替るものである。例へば「ござります―ございます」「gozarinasiu > gozaimasiu」下され―下やう「ku-

dasate > *kuidasai*、「お上りなさい―お上んなさい」「oqqrinasai > oqqa-n:asai」の如きは之である。

次でよく起る場合は、半母音[w]の脱落である。[w]は[a]と[a]との間に挟まれた時は、先行の母音を長く[a:]とし、前母音[e]と[a]との間に挟まれた時は、二重母音[ea]といふ一音節を作つて自らは脱け出てしまふ事が多い。例へば、

猿廻し―猿まあし *sai-umawaji* > *sai-uma:ji*

米俵 ―米だあら *komedawaha* > *komeda:ha*

これは―これあ *kohewa* > *koha* 又は *kok(i)ja*

C、母音の脱落

母音の脱落は大別すると二種になる。第一は母音が通鼻音[m・n 又は ŋ]といふ準母音によつて代辨される作用であり、第二は音節の合同に際して重母音となることを避けて單母音化する作用

である。

今、第一の場合の例として、

足らぬ—足らん taranu ∨ takan

行かぬ—行かん jukanu ∨ jukan

知らぬ—知らん sikanu ∨ sikan

は一見、母音[w]の脱落であるが、嚴密にいふと、熟音[am]全體が準母音[n]によつて取替はられてゐる。従つて、語尾の[-an]の音價は鼻母音[ã]にも近くなる。

又、次の如きは[n]と破裂音との兩閉塞音に挟まれて、母音が閉め出される場合である。

一日 —いちんち ijijiji ∨ i:inj

手に手に—てんでに teniteni ∨ tendeni

いづくにか—いづくんか idzukkunika ∨ idzukkungka

その他、[n]と[n]との間、[m]と[m]との間に來る母音は、閉塞の長音が成立することによつて脱落を見る事がある。

第二の場合には二つの言葉が連なる時、後の言葉の頭に母音が在ると、前の言葉のもつ母音と重複を來すから、その繁雜を避ける手段である。いはゆる反切は之にあたるが、音聲學的に言へば重母音の單音化である。

天降—あもり ama-oli ∨ amohi

荒海—あるみ afa-umi ∨ af-umi

我妹—わぎも waja-imo ∨ wajimo

〔附〕 添加作用

脱落の反對に、音節又は單音の添加によつて強調又は明瞭化の効果を擧げてゐるものがある。之を「添加作用」といふ。

A、音節の添加

鼻母音[ã]

反切
重母音の單
音化

添加作用
Addition

音節の添加

飛ばす—ぶつとばす
毆る—ぶんなぐる
掴む—ひつつかむ

次のは準母音「ん」が挿入される場合である。

既に—すんでに
午莠—ごんばう
五合—ごんがふ

B、子音の添加

春雨—はるさめ haruame ∨ harusame
小雨—こさめ koame ∨ kosome
有合—ありやい ariai ∨ arijai
またく—まったく mataku ∨ matakaku
しかと—しっかと shikato ∨ shikato

その他、子音の長音化(即ち促音化)によつて音の量的添加が行はれて、強調される事がある。

母音の添加

C、母音の添加

母音の添加は長音化によつて量的添加が行はれる。
夫婦—ふうふ
やや—やうやう
一・二・三—ひいふうみい
さきに—ちつきに sakini ∨ sakini

尙、近畿型の發音では、一音節の語は例外なしに二音節化される。例へば、「め」「めえ」「き」「きん」「は」「はあ」「け」「けえ」「と」「とあ」「す」「すら」。

四八 轉置作用

轉置作用には大體二つの原因が想定される。第一は調音の稍困難な音に對して執られた連音順位の轉換であり、第二は意義を媒介としての新舊音聲形式の類推作用である。

「轉置」は廣くその言語社會が常用すれば、その形式は普通語であ

轉置作用 Metathesis

舌もつれ
訥音

り語自體は變遷に過ぎない。しかるに、或特定の個人だけが用ひてゐる間は、それは特殊形式であり、いはゆる舌もつれ又は訥音と呼ばれる。

A、調音の困難から起つた轉置

(イ)〔社會的に承認せられた形式〕

あらかしーあたらし ataraji 〉 ataraji

山茶花 ーさざんか sanzaka 〉 sazanjka

薙 刀 ーなぎなた nanjigatana 〉 nanjinata

つごもりーつごもり tsujumori 〉 tsumogoki

(ロ)〔個人的特殊な形式〕

茶 釜ーちやまが tjama 〉 tjamaŋa

からだーからだ kadada 〉 kadaha

戸 棚ーとなだ todana 〉 tonada

卵 ーたがも tamago 〉 tajamo

意義の類推が
ら起つた轉置

B、意義の類推から起つた轉置

例へば「試む」(上二活)は同じ音聲形式の「心見る」(上一活)に含む「ミル」といふ音の媒介によつて「試みる」を生み出した。同様に「夢む」・「鑑む」に對して「夢みる」・「鑑みる」の活用が類推されたのは、既に國語史上の事に屬する。

同じ筆法で、現今も、續々と形成されつつある。例へば、「牛耳る」「アジる」「野次る」などの上二段活用は、「判じる」「論じる」「生じる」などの「ジ」といふ音を媒介としての類推作用である。

類推作用
Analogy

第二十一章 音 節

國語の音節

四九 國語の音節

音節の形式は各國語によつて異り、又之によつてそれぞれの國語の聽覺的特徴が定まるものである。

わが國語では、次の如きは一音節として知覺される。

1. 「單母音」……………例「ア」[a]
 2. 「一子音一母音」(假名文字の一子音)……………例「カ」[ka]
 3. 「母音の脱落」又は「無聲化した熟音」……………例「キ」[kɨ]
 4. 「通鼻子音」(撥音)……………例「ン」[ŋ]
 5. 「いはゆる拗音」……………例「キャ」[pja]
- 又、次の如きは二個の音節として取扱はれる。

6. 「二重母音」……………例「アイ」[ai]
7. 「長母音」(延音)……………例「アー」[a:]
8. 「長子音」(促音)……………例「ット」[tʰo]

大體からいふと、國語の「音節」はタイムの長さ、に即して居り、單音の數が割合に平均してゐる。母音の脱落又は無聲化した熟音がなほ「一音節」と看做されるのは、聽え、そのものよりも之に與へられるタイムの經過が手傳つて居るといへよう。又、いはゆる拗音において、は中間の半子音、例へば [pja] の [j], [kwa] の [w] が「涉り音」的の働きをする事によつてのみ一音節としての纏まつた知覺を完成する。従つてもし之らの半子音がその前に別の母音を迎へて [pja] なり [kwa] なるの形を執るとなれば、最早や「拗音」ではなく、二音節に分割されなければならぬ。

更に又、ここでいふ「二重母音」とは嚴密にいへば、寧ろ「複母音」であ

拗音

複母音

長母音

つて、本質的には熟してゐない場合である。従つて、發音される實際について言へば、純然たる一音節に相當する二重母音も勿論在るわけである。同様にして、長母音は、複母音である場合に對する概念が強い。例へば、「オー」は「オオ」「オウ」「オホ」などの音觀念から音節が成立する。しかし、之も實際の發音に純粹の「長母音」が無いわけではない。

長子音

長子音例へば「ツバ」「ット」は主としてタイムの經過が二音節の感じを與へてゐる。

音節の原理

五〇 音節の原理

試みに一呼氣を以て「ア」と出して見ると、大體において初めが強く後が弱くなるが、呼氣を途切らない限り、一つの音に聽える。所が、之を中途で一度弱めて見ると、「ア」の音は割れて二つに聽取れ

る(第53圖)。これ、前者の場合は一音節で、後者の場合は

二音節と看做される基本的な要件である。

「ア」といふ音色は大體において同じであつても、之に

加はる呼氣壓の變化は、音節を知覺する上に、重要な要素となるのである。



第 53 圖

右の例は偶々一個の母音に故意に加へた呼氣壓の變化であるが、一切の單音はそれぞれが独自の強度をもつてゐる。つまり發音に要するエネルギーの多寡が決まつてゐるのである。概していふと「子音」の強度は「母音」のそれに優つてゐる。

更に、子音の内ではその強度は「破裂音」「彈音」「破擦音」「摩擦音」「通鼻音」「半子音」の順序であり、母音の内では「小開き母音」「半開き母音」「大開き母音」の順序である。總じて「無聲音」は「有聲音」よりも強い。

又、これを聽覺の方からいふと、その聽えの度合は前者とは別途

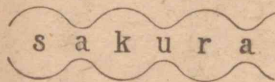
強度
Intensity

可聴度
Sonority

に、單音自體の固有する「音色」の如何にかかつてゐる。そして、その順位は大體において「強度」の逆であつて、「母音」の可聴度聴えは「子音」のそれに優つてゐる。

更に、母音の内では可聴度は「大開き母音」「半開き母音」「小開き母音」の順序であり、子音の内では「半子音」が最も聴えに富み、順次遞減して破裂音の無聲音において最も劣る。

かく「強度」又は「可聴度」において相異なるものが取組むとき、即ち「子音」と「母音」といふ結合においては、前例の「ア」に見る如き單一の音節を知覺せしめる事になる。



第 54 圖

特に國語の如く、「子音」+「母音」を熟音として、その繰返しを以て言葉を構成するものは、音節の切れ目も極めて規則的である。一つ々々の熟音にあつては、「壓」に優勢な子音が、「聴え」に富む母音の共鳴を得て、短直な感じの纏まり、

を感じしめる。又、音節末の母音が「壓」を落した直後へ、次の子音が壓を上げて續くため、音節は恰も竹の節ふしを見る如く鮮かである。

音節の現象そのものは物理的である。けれども之を知覺するのは、人間がそれぞれの國語に親しみ會得したいはゆる音感である。音節に働く「音感」は、スキートが稱へたやうに音の單一感と音の分離感とである。

音感
Lautgefühl
音の單一感
Sense of
Unity
音の分離感
Sense of Se-
paration

音節とリズム

五一 音節とリズム

拍音

音節は音を稱へる上の、又は知覺する上の程よい單位である。この事は多くの場合、拍音の單位にも合致する。それで、五・七・五の俳句だの、三十一文字の短歌だの、七・五調とか五・七調とかの詩文にも適用される。

けれどもこの拍音に乗る音節は、屢々、その長さは單獨の場合よ

Tempo
テンポ

りも壓縮される事がある。言ひかへると、二つ又は三つの音節が弱化されて、音色の推移にテンポを増すのであるが、之がため「メロデー」(旋律)は却つて趣きを加へることも多い。例へば、

おんひらひら 蝶も金比羅 参り哉

雀の子 そのけそのけ お馬が通る

この場合、二音節の「ひら」のけは拍音單位からいふと一つに、三音節の「おうま」とほるは二つに、それぞれ壓縮されるが、知覺は特別に無理を感じない。これは音節感以上にリズムの快感が働くからであらう。

リズム感といふものは、人間が先天的に有する潜在感覺の一つといはれてゐる。例へば、時計の振子は時間的にも、エネルギー的にも、正則に音を立ててゐる筈であるのに、人間の音知覺は敢て之をリズム、ミツクに感取する。即ち「チクタク」は強弱々々の對照

リズム感

である。

このやうにリズムを成す「對照」は強弱關係の外に、高低關係あり、長短關係あり、又音色の排列關係などもある。「對照」は又、例へば七五調とか五七調とかの場合ならば「比例」と見ることも出来る。

韻律
Rhythm

なほ音色の排列關係による場合のリズムを、特に韻律と呼ぶ。前出の例でいふと、「おんひらひら」と「金比羅」とが「ひら」の對照による音色的リズムを成してゐる。「そのけ・そのけ」も同様にして、
a b c d a b c d 又は一括して A B の對照といふ事が出来る。

尚、二つ以上の音色又は音程のものが同時に協和するのを「ハーモニー」(調和)といふ。例へば、同じ高さの音をピアノとヴァイオリンとで同時に演奏する場合とか、一オクターヴ違つた男聲と女聲とが合唱される場合とかは之である。

一個のヴァイオリン、又は一人の聲帯では同時に二種の音色又は音程

ハーモニー
Harmony

メロディー
Melody

リズム
Rhythm

を出すことは出来ないが、時間的に前後すれば、「ハーモニー」を作ることが出来る。つまり一定の都合よい配合の音色が一つの流れを作るのであつて、之をメロディー(旋律)と呼ぶ。

メロディーの流れは必ず「強」「弱」「高低」「遅速」「音色の明暗」などの交互間隔といふものが生じる。その幾つかの間隔には、或る「對照」又は「比例」がある。之を名付けてリズム(韻律)といふのである。

第二十二章 アクセント節

アクセント
の本質

五二 アクセントの本質

アクセントとは言葉に加へられる一種の調子である。凡そ調子には強弱・高低・緩急など物理的性質の複合したものが認められる。アクセントにおいても同様であるが、わが國語の特質としては、右の内の「高低」が代表的に問題となる。

之に對して、イギリス語・フランス語・ドイツ語などは強弱關係が主要件である。それで之らを「強弱アクセント」又は「力的アクセント」と呼び國語や支那語やスウェーデン語のやうなのを「高低アクセント」又は「音樂的アクセント」と呼ぶ。

「高低」といふのは物理学でいふやうに振動數の多寡であるが、そ

音樂的アクセント
Musical Accent

力のアクセント
Dynamic Accent

強弱アクセント
Stress Accent

高低アクセント
Pitch Accent

の觀念は音節と音節との相對的關係であつて、音樂などといふ一定の音の絶對値ではない。従つて、單音節語が「高」であるか、「低」であるかは、他の言葉と併置して見る外はない。例へば、

	ヒ	日	キ	氣	ハ	葉
	火	(高)	木	(高)	齒	(高)
		日		氣		葉
		(低)		(低)		(低)

助詞「が」「の」「を」「に」の如く、それ單獨では「非高」「非低」の立場にあるものは、直ちにアクセントの有無を決することに適しないが、後に説く「アクセント節」の一部を構成すべき素材である。

名詞・動詞・形容詞・副詞・等の如く、單獨でも語義の明かなものは、必ず一定のアクセントを帯びてゐる。例へば、

〔名詞〕	ヤクバ	「役場」	チドリ	「千鳥」
〔動詞〕	サケブ	「叫ぶ」	ヤスム	「休む」
〔形容詞〕	タカイ	「高い」	キレイ	「綺麗」

〔副詞〕 ポツポツ「ぼつ〜」 ハヤ「早や」

なほ、「アカルイ」「オモイ」の如く、その語詞の内部に音調的起伏の見られないものも少くない。之らは、その「非高」「非低」の連音形式が直ちに「平型」といふ一種の「アクセント形式」として働いてゐる。

アクセントの型

五三 アクセントの型

同一の語詞に對する音調的起伏は關東・關西及び九州等によつて少からず異なるものであるが、標準語だけについて言へば、左の四種の「型」が見られる。

1. 平型 (ぼう型)

A	B	C
中	中	中
2. 高低型 (へび型)

A	B	C
高	低	低
3. 低高型 (もぐら型)

A	B	C
低	高	高
4. 低高低型 (ねこ型)

A	B	C
低	高	低

第 55 圖

通常、Aの部分に當るのは一音節だけで、B及びCの部分はそれぞれ一音節又はそれ以上が當てられる。「高」の部分と「低」の部分との落差は、孰れの型にも又孰れの語にも一定してゐるわけではない。即ち「降るとか昇るといふ傾向、自體が問題である。しかも、降るといふも昇るといふも、波動のやうな柔かい移調形式であつて、樂譜のやうな段階的變化ではない。

この滑かな移調形式は、數個の音節を繋いで一語としての「纏まり」を作る原動力ともなつてゐる。又韻文などで同じ語詞が繰り返される場合には、音色による韻律は勿論であるが、更に、アクセント形式がリズムに参加する所も少くない。左に、四つの「型」に對して、それぞれ數例を擧げる。

1. 「平 型」 タライ(鹽)、サカヤ(酒屋)、オドカス(威す)、ナグサメル(慰る)。

2. 「高低型」 チノーギ(忠義)、ハハラ(野原)、キンギョ(金魚)、

ハナカラ(最初から)。

3. 「低高型」 アシタ(明日)、チカラ(力)、ヒケシ(消防夫)、ハニカム(恥しがる)。

4. 「低高低型」 アサヒ(朝日)、シホー(四方)、イタム(痛む)、ハナス(話す)、ソコナウ(損ふ)。

五四 アクセント單位とアクセント節

意義を宿す單位である語詞の最小なものには、必ず一定のアクセントが伴ふ。この場合の語詞はアクセントの型にとつても最小單位である。一般の辭典に収録されてゐる語彙は概してこれに當る。この基本的なものを假りにアクセント單位と名付ける事とする。

アクセント
單位とアク
セント節

アクセント
單位

さて辭典の中の語詞は、その音聲化の活用に際してアクセントの型は常に一定不變かといふと、決してさうではない。例へば「アメといふ」高低型と「アガルといふ」平型とは、その活用に當つて合併されると、「アメアガリ」となつて新たに「低高低型」を作り出す。

最初の「アメ」(雨)は意義の最小單位であるから、これ以上、小さな言葉も、そのアクセント形式も、索める事は出来ない。即ち、このまま「アクセント單位」である。然るに「アメアガリ」は意義を索めて二つに分割する事が出来、従つてアクセントも亦その基本的なものに復する事が出来る。しかも、「アメアガリ」はこのままで、或意義に聯る語詞であり、そのアクセントも一つの基本型(即ち「低高低型」)を帯びたものである。斯る場合、之を名付けて「アクセント節」と言ふ事とする。

「アクセント節」は國語の形態學的特質を遺憾なく表明してゐる

アクセント節

から、この觀念によつて動的な國語アクセントの姿を十分に把握する事が出来る。

例へば、前出の「アメアガリ」は更に、

1. アメアガリデ
2. アメアガリデス
3. アメアガリデスカラ

と、次第に追加されて行つても、その基本型「低高低型」は、アクセント節を分割しない限り、決して狂はない。

もし、之が更に伸びて、「アメアガリデスカラキレイデス」の如きを、一と息に發し得ないで分割されるとなれば、そのアクセント節は「アメアガリデスカラ・キレイデス」となる。即ちアクセント節は二個になつたのである。

以上の例でも凡そ明かであるやうに、「アクセント單位」は謂はば、

常住的單位

臨時的單位

アクセント型の常住的單位であり、語詞の靜止態にある姿である。之に對して「アクセント節」は、アクセントの臨時的單位であり、語詞の活動態にある相である。共に意義に聯なる音聲形式であり、連音を纏める重要な要件である。同時に音聲の形態的知覺の上から大切な二面である。

第二十三章 文章法

イントネーション
In-oration

五五 イントネーション 音の抑揚 音調

本章にいふ文章法とは、言ふまでもなく「音聲文章法」であり、その別名は「イントネーション」である。茲に極めて簡単に、

「水」

單語・名詞
意義

といふ文字があるとする。之は一般文法では單語であり、名詞といふ品詞に屬する。辭典によれば「酸素と水素との化合物で云々」と解説してあるが、それは平面態又は靜止態における意義である。しかるに、之が「音聲文法」になると、少くとも、

1. 「みづ」
2. 「みづ」

意味する
文章

3. 「みづ」

の如く音調的に立體化されて、それぞれ別個に意味する所が現はれて動態となり、文章の働きをする。即ち(1)では水以外の他のものを強く否定して水自體を判きり肯定し主張し、(2)では水ですかといふ純然たる疑問文を構成し、(3)では何だ他のものかと思つたら水の事かと半肯定半疑問の文章として働いてゐる。

さて、イントネーションの本質は、國語のアクセント同様に音の高低關係である。けれども、両者が同一の言葉に對しても全然別個に働きかけるものである事は、次の如く兩者の重ね寫眞を撮つて見る事によつて明かである。例へば「ボク」は語尾が低い、「僕ですか?」の省略のときは、語尾に昇調(↑)がつかなければならぬ。すると、母音が延びて、

「ボク」は [boku:] 又は [boku:]

となり、「アクセント型」は何ら狂ふことなく、「イントネーション」を帯びる。

又「イチ」は語尾が高いが、「七ではないんだ、一だよ！」と強く念を押す時なら、語尾が降調(↓)をもたなければならぬ。そこで、

「イチ」は [itʃi:] 又は [itʃi:]

となる。

イントネーションの形式

五六 イントネーションの形式

國語のイントネーションは、次の五通りに分ける事が出来る。

- (1) 降調型(↓)
 - (2) 卓立調つき低降調型(↓)
 - (3) 昇調型(↑)
 - (4) 卓立調つき低昇調型(↑)
 - (5) 降昇調型(↓)
- 左にそれぞれ數例を掲げる。

1. 降調型(↓)

イ、「斷言」の陳述

降調型

それは 本物です

わかつた

僕は 反対だ

口、命令

ぢや それを 止せ!

やれ

早く 行け

ハ、疑問詞つきの疑問

いつ 出来ませう

それは 幾らです

誰が 来るんです

2. 卓立調つき低降調型(一)

イ、宣言又は示唆の陳述

卓立調つき低降調型

僕は それを 本當とは 思はない

あなたが 正しいのかも 知れませんが

月曜日が どうしたんだ

口、命令

私のを お使ひ

静かに なさい

私の 言つた事を 忘れるな

ハ、疑問詞で始まる質問

いつ 来ませう

君は それを 何處へ 置きましたか

何が 起つたんです

3. 昇調型(一)

イ、然リ(Yes)否(No)で答へ得る質問

昇調型

あなたは そこに います
それで 充分です
分ります

ロ、 反覆の質問

お名前は
どこで あの人を 見たつて
お断りに なりました
（既にお伺ひ致しまして、お答へに預りませう）
（何處であの人を見たか）
（あなたは本當に断はるか）

ハ、 抗議的命令

早く しろい （又は早く）
待たせる な
おいて よ

ニ、 「の」にどうしてを含む陳述

あの人は 昨日 よかつたんだ
（そんなに悪いらう今日は）

僕は 二千米泳げるんだ
彼は いつも 賛成なんだ
（泳にどうして四千米）
（それに此度はどうして不賛成なんだらう）

ホ、 未決断の敘述

何も 紛らわしいことは ないのに
え、 知りません
と 思ひます
（が勿論間違つてる）
（かも判りません）

卓立調つき低昇調型

4. 卓立調つき低昇調型(一)

おばさん お早よう
また お目に かかりませう
まあ きれいだこと

5. 降昇調型(一)

イ、 讓歩的・協調的反対・「對照的」・抗辯的の陳述

それは 私のいふ 意味ぢやないんです
（あなたのおつしやる意味）

降昇調型

人は いつも 思つてる通り 言ふと限らない (時には考へてることもかくすものだ)
私は 一人々々に 話しやしない (誰かには話すとしても)

口、「協調的」命令「懇親的警告」

墜ちないやうに 氣をつけて
あんまり おそく 来ないやうに
今日は 行かない方が いいでせう

以上の如き基本型は「重文」又は「複文」においては二種以上の基本型を重ね、又は種々の取組をなすものである。次にその主な形式を示さう。

基本型の繰返し

1. 基本型の繰返し

イ、同格の場合

人でも 影でも ない

神戸の 伯母さん? あのお年寄りの 伯母さん?

花も 咲かねば 鳥も 歌はない

口、「追加及び考へ足し」

それは 緑にも見え 青にも見える

居たよ 僕も

あれに 話すな まだまだ

2. 基本型の取組

イ、助辭が昇調をもつ場合

新京は 滿洲國の首府です

酒は 米で造る

過ぎたるは 及ばざるが如し

口、對照形をなす場合

甲にして 乙に非ず

思つただけでなく 實行したんだ

基本型の取組

雨の日も 風の日も 絶えず 倦まず

ハ、「又は」及び等の接續詞のある場合又はその省略の場合

それは黒か 又は 青だ

太郎でもなければ 次郎でもない

明日は 理科も 讀方もあります

ニ、列舉する場合

一、二、三、四、五

春すぎ 夏すぎ 秋が来た

彼は 帽子を被つて 鞆をさげて 出て行つた

第二十四章 卓立法

五七 プロミネンス 發音

前述の「イントネーション」は文章の組織形態に關するものであつた。今「プロミネンス」といふのは文章の陳述せんとする主眼點を強調し、卓立させる音聲手段である。兩者は共に動態的な力をもつて居り、活用にあたつては重ね合されるが、その本質は自ら別物である。物理的に見ても、前者が高低關係に屬するに對し、後者は強弱關係が主である。

文例をもつてすると、「この本を君に貸して上げる」は、文章法から見ると降調（）を執る單なる平敘文である。しかるに、之に或主張點を設定すると、左の如く分れる。太い文字で示した所は音調が

一層強められる事を示す。

- (イ) この本を 君に 貸して上げる
(卓立)
- (ロ) この本を 君に 貸して上げる
(卓立)
- (ハ) この本を 君に 貸して上げる
(卓立)
- それぞれから汲み取られる主張は、

- (イ) 君に貸すのは眼前に指示した一冊の書籍に限定されて
 ゐて、他の一切の書籍ではない。
- (ロ) この本を貸すのは君といふ眼前の特定の人であつて、他
 の總べての人を除外する。
- (ハ) この本を君に手渡すのは貸附るといふ形式であつて、進
 呈とか返却とかの意ではない。

このやうに言外に含む主張點は、音聲化によつて初めて實現さ
 れる事である。豫め之を視覺に訴へる用意をすとなれば修辭

上、種々の工夫を要し、時には餘分の挿入語や轉置法によらなけれ
 ばならぬ。假りに前例を書直して見ると、

- (イ) 君に 貸して上げるのは、「この本で「す」」
- (ロ) この本を 貸して上げるのは、「君に「て」す」
- (ハ) この本を 君に渡すのは、「貸して「上げ」るの「て」す」

となる。これだけの煩瑣と不自然を省くのが言語の立體化又は
 音聲化の力であり、卓立法の働きてある。

かく「プロミネンス」は特定の位置に加へられる強勢であるが、そ
 の位置は大體において文脈及び讀者の心位によつて判定せられ
 るものである。この判定の力を得ることがいはゆる讀書の訓練
 であり、音聲化の練習である。文章を視覺本位に平面的に讀むか、
 聽覺を基底として立體化して味はふかは、國語教育上、その「鑑賞力」
 や「創作力」に深さ廣さを決定する大切な仕事である。

卓立法の形式

五八 卓立法の形式

卓立語

卓立法には大體二つの形式がある。第一は前節に擧げた「プロ
ミネンス」で、即ち特定の位置に加へられる強勢的卓立法である。
第二は語自體が卓立的の性質を帯びたもの、いはゆる卓立語にあ
たるものを使用する方法である。

左にそれぞれについて數例を列擧しよう。

位置による卓立

A、位置による卓立

ぼくは、ひよこが かはいくて たまりません。

よい刀を 千本 あつめる積りで、九百九十九本は取つた。
道の片がは草ばかりか 食つてあつたからでございませぬ。
「みごとな瀧だ」といつて、眺めて居りました。
をばさん 猫はどうしました。

語詞による卓立

B、語詞による卓立

イ、長母音

シーローイ、ナーガーイ、マルーイ

ロ、長子音

アツカイ、サツキ、ヤツバリ トツテモ

ハ、音韻挿入

タンビ、ヤンワリ、オンナジ、ダンマリ

ニ、重語法

シロイ、ナガイ、タカイ

なほ、別の觀點からすると、卓立法には積極的強勢法と消極的強
勢法とがある。これらは別名、プラスの誇張法「マイナスの誇張法」
であつて、強度に加へる手心である。例へば、雷鳴や怒聲を敘述す
るにあたつて、高強の「ゴロゴロ」とか「コラッ！」を、反對に低弱にして

積極的強勢法
Positive Emphasis
消極的強勢法
Negative Emphasis

逆効果

テムボ

ポーズ

いはば、聲をしのばせて、逆効果を収める方法である。

又、「プロミナンス」は音の強弱・高低のみに限らず、發音のテムボ（緩急）が有力に干渉することがある。更に語間又は語中に加へられるポーズ（休止）の長化又は短化は、巧妙なる話手の屢々活用する手段である。

第二十五章 音聲形態

五九 音聲形態

音聲形態
Laug, stali;
Sound form

個人々々の有する言語音が、その人の後天的學習によつて把持されたものであることは既に述べた。又、言語音の種々の姿についても既に觀る所があつた。しかし、研究の對象としての音聲と、學習の對象としての音聲とは、自ら別物である事を見逃してはならぬ。前者の音聲は多分に客觀性を帶び、後者は殆ど純粹に主觀的である。謂ひかへると、前者は非常に分析的であるに對し、後者は総合的であり印象的である。

例へば、ここに「キ」といふ音があるとしても、研究の對象としてならばその要素を明かにする必要上、[k]とか[i]とかといふ成素、又は

音聲的音聲
形態

更に詳しく分析が他の諸音との比較考究上必要であらう。しかるに學習の立場からならば、「キ」は「キ」といふ音色の聽覺的印象が直ちに受容られる事足りる。つまり「キ」はそのままの纏まりにおける聽覺刺激の一單位なのである。心理的には「キ」といふ音節がそのまま印象づけられるのであつて、印象づけられたものは成素の個々ではなくて、音聲的音聲形態である。

更に「キク」とか「キノオ」といふ言葉の學習にあつても、矢張りその言葉が一つの音聲形態としてである。「キク」の「キ」と「キノオ」の「キ」が共通してゐるとか、多少違ふとかいふのは後の研究心から來た分析作用の結果と言ふべきである。即ち「キク」とか「キノオ」は、單なる音節の積重ねではなく、それぞれ音聲的に特有の連音の纏め方が働いてゐる。

かく心理的に纏まつたものは、その語詞の音聲形態である。假りに「キク」[kiku]といふ纏まりが分析されて見たら、その部分々々は、それぞれの單獨の時のものと多少とも性質が違つてゐるであらう。けれども「キク」は「キ」と「ク」との連音として首肯される。

又別の例を挙げると、「カ」と「ハ」と「ラ」といふ三つの音節があるとする。單獨の場合にはそれぞれが独自の音價をもつてゐる。けれども「カハラ」の順序に排列し連結すると、「ハ」[ha]は [wa] 又は [a] に移つて、三個の音節に渾一體とした纏まりを成さしめる。之はかねて所有せる語詞的音聲形態が蘇つたからであつて、「ハ」といふ音節の知識による單なる讀み替へから積上げられたのではない。

言葉とは、かく音聲心理的に形態を成してゐるものである。この形態が聽神經に印象づけられ、記憶として成立したものが、言語材料としての音聲表象である。謂ひかへると、音聲表象とは [p] [s] [t] [n] [h] 等々の如き部分々々のストックではなく、「音節」とか「アクセ

語詞的音聲
形態

形態
Gestalt

ント單位』とか「アクセント節」といふ纏まり、この纏まりは心理的の立場から名付けて「音聲形態」である。即ち、學習作用が、かく「形態」に準據して行はれる以上、その指導には分析的研究と同時に、この形態的取扱の研究が併用されて宜しいわけである。

表現形態と
陳述形態

六〇 表現形態と陳述形態

表現力・陳
述力
「あらはす力」
「のべる力」

音聲形態は主なる特質から二大別することが出来る。一つは表現力に特質をもつもので、他は陳述力に特質をもつものである。碎いていふと、「あらはす力」と「のべる力」とである。兩者の對立は、

(1) 表現力——「音節・アクセント單位及び節」
(2) 陳述力——「イントネーション」・「プロミネンス」

である。

(1)は意義をあらはすもの、又はそれを分擔するものである。即ち「アクセント單位」又は「節」はその言葉の語意と密接不可分のものであり、「音節」はその部分を擔當するものである。

(2)は意味するもの或は「のべるもの」である。「イントネーション」は文章の組織を構築して或意味を陳述する力をもち、「プロミネンス」は文章中の特定の位置を卓立することに依つて、或意味を陳述するものである。

更に兩者の根本的相違は、前者は「國內的事象」であり、後者は「國際的事象」であることである。即ち「音節」の構成は各國語獨自のことであり、「アクセント」も各國語の語彙に固着する事柄である。しかるに「イントネーション」や「プロミネンス」は心理的に各國語へ共通する事柄である。例へば「然り」の意ならば語調を下げ「然るや」の意ならば語調を上げ、又主張の中心語には強調を加へるのは、獨りわ

が國語だけの問題ではなく、全世界に共通する言語現象である。かくて「表現」と「陳述」とはそれぞれの立場において、音聲形態を樹立する。又實際の言語活動では双方が分存するものではなく、之らは恰も重ね寫眞の如く、表現形態を爲すものの上へ陳述形態が焼付けられて、新たに綜合的音聲形態が成立する。國語教育はこの最後のものに向つての精進であり、音聲學はその過程としての基礎工事であるといへよう。

第二十六章 國語と音聲教育

標準音と標準アクセント

六一 標準音と標準アクセント

「標準音」や「標準アクセント」は、いはゆる「標準語」の觀念と同様に稍漠然としてゐる。小學國語讀本は大體標準語で書かれてゐるといふ。しかし、あの通り語つて日々の用務を達してゐる人間が、假令東京の中流にせよ上流にせよ、現存するわけではなからう。本書が既に第二章及び第四章において述べたやうに、何人と雖も言語を活動に移せば、それぞれの個性に包まれなければならぬ。

それでも尙、多くの人々の語る所を抽象すれば、或程度までの廣い共通性が見出さるべき事も既に述べた。いはゆる「標準語」はこの意味において一種の抽象言語である。そして、その抽象條件が、

抽象言語

比較的東京とか、その中流人士とか、現代とか、口語法とか、實用向きとか、に置かれたことも事實である。但し、その手續が純客觀的調査に基いたものでなく、主として編纂者の主觀に基いてゐるため、多少の例外の在るべき事も免れまい。しかし之らの瑕瑾は、更に廣い新聞雜誌、單行本などの協力と相俟つて、絶えず抽象化、具體化が繰返され、全社會としては兎も角、標準的、な、大勢に方向を定めて前進してゐるものと認められて宜しいわけである。

ただ、今日までの普及が餘りにも書き物、萬能であつた爲に、折角の目標もその音聲化においては歩調を合すことが出来なかつた。音聲とアクセントとが語法に伴はないといふ事は、語法そのものも完成したと見る事は出来ないのである。例へば、標準語法のテクスト、

「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」

「カアカア カラスガ ナイテ イク」

「オヒサマ アカイ アサヒガ アカイ ヒノマルノ ハタ

バンザイ バンザイ」

が、甲乙丙の地方の音で、

「サイダ サイダ サクダ ガ サイダ」

「ケヤー ケヤー ケヤラスガ ニャーテ イク」

「オシサマ アカイ アサシガ アカイ シノマルノ ハタ

バンザイ バンザイ」

と分裂し、

「トマレ トマレ カノハナニ」

「ハシレ ハシレ シロ カテ アカ カテ」

のアクセントが、他の地方で

「トマレ トマレ ナーノハナニ」

音聲・アクセント・語法

「ハシレ ハシレ シロ カテ アカ カテ」

と音聲化される。これでは標準語といつても、言葉の要件としての重要な部分が取残された事になる。

幸ひ今日は、書き物の短所を補ふために「蓄音機とか」「發聲映畫とか」の中、のテキスト向きのもの、「ラヂオ放送」中の「アナウンサー」又は少數の選ばれたる講演者中に、標準音乃至標準ア、ク、セントの具體化された範例を聴くことが出来る。その他、このやうな用具を通さなくとも、適當なる個人に直ちに接し得る機會は、今日では大いに殖えて來てゐるから、之らを盛んに利用すべきである。

音聲學に關する書物は、名の通りどこまでも書物であるから、どのやうに完備しても直ちに音聲そのものを表現する事は出来ない。書物の使命は「學習者」と「示範者」との中間に在つて、理論や練習の資料を供給する點にある。従つて、抽象的な標準音や標準ア、クセントの研究並びに指導は自ら音聲學の知識とそのよき活用に俟たなければならぬ。

國語美

六二 國語美

よく「國語教育」と「國字教育」とが履き違へられるやうに、「國語美」が「國字美」と同視せられ勝ちなのは洵に遺憾である。言ふまでもなく、國語本來の美は、音聲化の美でなければならぬ。

又、音聲化の美は、決していはゆる聲色の美ではない。世には天性の美聲をもち乍ら、或は激しき方言に育ち訛音を語り自他ともに不快をかこつ事のあるやうに、他方では音聲化の醇正のために自己の意志を充分に披瀝し得、聽手をして好んで傾聽せしめ得る事も少くない。——これらは要するに、音聲化の美即ち「表現の要」。「陳述の妙」の具現如何が問題なのである。

音聲化の美

表現の要は前章にも説いたやうに「音節」「アクセント」に關する事柄である。特に音節に對しては「調音の正確又は齒切れのよさ」が問題になる。アクセントに對してはいはゆる「東型」を多く聽くことを要し、成るべく幼少の頃に練習を始めることが大切である。既に相當の年齒を重ねてからのアクセント練習は、寧ろ消極的方法を選んで我流の強い節廻しを廢し成るべく平調を用ひる心構へがよいとせられてゐる。これでも語間のポーズに心をくばれば、却つて落着いた聽きよい表現の出来るものである。

更に進んで陳述の妙を獲得するには、盲目的に舌末の練習をするよりも、「文」の眞意を充分に把握することが先決問題である。「イントネーション」にしても、「プロミネンス」にしても、之らは既に述べた如く人間に共通する心理的問題である。そこには自然の湧出力があり、國境や國語別を貫いて流れる「音聲形態」が在る。即ち眞

陳述の妙

音聲形態

に理會されたときは、生理と情緒の自然の姿が音聲形態を促して、話手の口を衝くべきである。

國語教育には、文字を授けるといふ大きい役割がある。けれども、授ける手段には矢張り「音聲」の媒介を要し、授け終つた上は更にその「音聲化」によつて完結されなければならぬ。つまり「理會の力」は或場合は書ける、といふことによつて確め得るが、より一般的な場合は眞に讀める即ち適正なる音聲化の行はれる事によつて立證される。この最後の段階の達成においてこそ、國語美の眞髓は發揮されるであらう。この意味において、音聲教育は、決して國語教育の餘分の負擔ではなく、その重要な一斑であり、いな寧ろ速かに全體を一層有効に進展させる油の如きものである。

眞に讀める
・適正なる
音聲化

(をばり)

附 録 (その一)

音聲記號一覽表

【母音の部】

記號	假名	名 稱	注 釋	本文對照ページ
1	ア	「奥母音」「大開き母音」	標準的なア……………三一	
		「前母音」「大開き母音」	二重母音の前音……………三二	
		「中母音」「曖昧音」	エとオの中間音……………三二	
		「前母音」「大開き母音」	エとアの中間音……………三二	
		「前母音」「小開き母音」	標準的なイ……………三三	
		「前母音」「小開き母音」	イとエの中間音……………三四	
		「中母音」「小開き母音」	奥まつたイ……………三四	
		「奥母音」「小開き母音」	標準的なウ……………三五	
		「中母音」「小開き母音」	前進したウ……………三六	
		「奥母音」「小開き母音」	唇を強く丸めたウ……………三六	
3	ウ			
2	イ			
1	ア			

【子音の部】

4	[e]	エ	「前母音」「半開き母音」	標準的なエ……………三七
	[ε]	「前母音」「大開き母音」	大開きのエ……………三七	
5	[o]	オ	「奥母音」「半開き母音」	標準的なオ……………三八
		尚、i u は、i u それぞれの「無聲音」である。		

附 録(その一)

記號 指 標 名 稱

1	[k]	カの子音	「軟口蓋・奥舌破裂音」「無聲音」……………四九
2	[g]	ガの子音	「軟口蓋・奥舌破裂音」「有聲音」……………四九
3	[ŋ]	ガの子音	「軟口蓋・奥舌閉塞通鼻音」「有聲音」……………四九
4	[s]	サの子音	「舌先・齒裏摩擦音」「無聲音」……………五四
5	[z]	ザの子音	「舌先・齒裏摩擦音」「有聲音」……………五四
6	[ʃ]	シの子音	「前舌・奥齒莖摩擦音」「無聲音」……………五五
7	[ʒ]	ジの子音	「前舌・奥齒莖摩擦音」「有聲音」……………五五
8	[t]	タの子音	「舌先・中齒莖破裂音」「無聲音」……………五七
9	[d]	ダの子音	「舌先・中齒莖破裂音」「有聲音」……………五七

本文對照ページ

10	[tʃ]	チの子音	「前舌・奥齒莖破裂音」「無聲音」……………五八
11	[dʒ]	ヂの子音	「前舌・奥齒莖破裂音」「有聲音」……………五八
12	[tʰ]	ツの子音	「舌先・前齒莖破裂音」「無聲音」……………五九
13	[dʰ]	ヅの子音	「舌先・前齒莖破裂音」「有聲音」……………五九
14	[n]	ナの子音	「舌先・中齒莖閉塞通鼻音」「有聲音」……………六二
15	[ɲ]	ニヤの子音	「前舌・奥齒莖閉塞通鼻音」「有聲音」……………六三
16	[h]	ハの子音	「咽腔摩擦音」「無聲音」……………六五
17	[ç]	ヒの子音	「前舌・硬口蓋摩擦音」「無聲音」……………六六
18	[p]	フの子音	「兩唇摩擦音」「無聲音」……………六七
19	[pʰ]	パの子音	「兩唇破裂音」「無聲音」……………六八
20	[b]	バの子音	「兩唇破裂音」「有聲音」……………六八
	[f]	フアの子音	「唇齒擦音」「無聲音」……………六九
	[v]	ヴァの子音	「唇齒擦音」「有聲音」……………七〇
21	[m]	マの子音	「兩唇閉塞通鼻音」「有聲音」……………七二
22	[j]	ヤの子音	「前舌・硬口蓋摩擦音」「有聲音」……………七四

附 録(その一)

25	[d]	ン	音	「奥舌・軟口蓋端不完全閉塞通鼻音」	「有聲音」	……	八一	
24	[w]	ワ	の子音	「兩唇輕擦音」	「有聲音」	……	七九	
	[r]			「反覆彈音又は卷舌音」	「有聲音」	……	七八	
	[r]			「舌先裏・硬口蓋摩擦音」	「流動音」	「有聲音」	……	七七
	[l]			「兩側音」	「有聲音」	……	七六	
23	[t]		ラの子音	「舌先彈音」	「有聲音」	……	七六	

附 録 (その二)

音聲轉寫文例

注意

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

右に引く太い傍線(——)はアクセントの高調ある音節
 右に引く細い傍線(——)はイントネーションの動く範囲
 太字は強勢による卓立
 字の左に附す三角(△)はその音節の無聲化
 横線(—)は小休止、(—)は中休止、(—)は大休止

【假名の部】

1 シ[△]ロ カ[△]テ[△]ア[△]カ カ[△]テ[△]＝

2 コ[△]コ[△]マ[△]デ オ[△]イ[△]デ[△]ーソ[△]ロ[△]ソ[△]ロ オ[△]イ[△]デ[△]＝

3 **ビ[△]イ[△]チ[△]ク**ー**ビ[△]イ[△]チ[△]ク**ーヒ[△]バ[△]リ[△]ガ ア[△]ガ[△]ル[△]＝**テ[△]ン[△]マ[△]デ** ア[△]ガ[△]ル[△]＝

4 ヤ[△]マ[△]ニ[△]ーチ[△]イ[△]サイ キ[△]ヲ[△]ー**コ[△]ホ[△]ン** ウ[△]エ[△]マ[△]シ[△]タ[△]＝

6 ソ[△]レ[△]ハ[△]ーヤ[△]マ[△] デ[△]ス[△]ネ[△]＝

7 ナ[△]ン デ[△]ス[△]＝

8 マケテモ ヨイカラ一シマイマデ一ハシルモノダ

B

- 1 ワカッタ一ワカッタ
- 2 ア一キシヤダ一キシヤダ
- 3 ワタシガ一ワルカッタ一オマエハ一エカキニ ナルガヨイ
- 4 ソレハ一ダレ デスカ
- 5 シンバイ シナイデ一モオ オヤスミ
- 6 ハタケモ マツシロ一ミチモ マツシロ一マツシロナ ナカオ一ハシツテ イコオ
- 7 コホレ一ワンワン一ココホレ一ワンソン
- 8 タロオ一ヒヨコガ カエツタヨ一ト オツシャイマシタ

【記號の部】

A

- 1. jŋho jkäte | äka jkäte ||
- 2. kokómáde yáide | sóhosoto yáide ||
- 3. -pí:ŋíkŋ | -pí:ŋíkŋ | ǵibát:ŋa ǵajáru || -témáde ajáru ||

- 4. jánáni | ǵŋísá kio | -gohón uemáŋita ||
- 5. sóhewa | jáná desŋ ǵne ||
- 6. náa de ǵsŋ ||
- 7. makétemo jókaka | -jímáímáde | hafŋrumonoda ||

B

- 1. wakáta | wakáta ||
- 2. -a | kíŋáda | kíŋáda ||
- 3. -wátá:ŋa | wáturkáta | omáewa | -ekákiŋi náruŋajol ||
- 4. sóhewa | ǵáde desŋka ||
- 5. jímpat jíndáde | -mo ojasumi ||
- 6. hatakemo ǵndá:ŋho | mǵŋmo ǵndá:ŋho | ndá:ŋhona rákáo | hafŋre ǵiko ||
- 7. kǵkohote | wáawan | kǵkohote | wáawan ||
- 8. -tato: | ǵijokoga káeta:jo | to of:amaŋita ||

「國語ニ於テハ國語ノ構造・特質ヲ知ラシメ」、「話方ハ方言訛語ヲ矯正シ醇正明晰ナル國語ノ使用ニ習熟セシムベシ」
(文部省・師範學校教授要目抜萃)

「凡言詞の間、聲音の相成す所にあらずといふものなし。我國古今の言に相通ぜむ、音韻の學によらずして、また他に求むべしとも思はれず」
(新井白石「東雅」の總論)

「師範學校生徒ノ卒業試験ニ於ケル國語科要目ニハ讀方・誦誦・及び音聲學ガ國語學習ノ必須條件ナル事ヲ明示スベキコト」
(英國々語教育制度調査委員會報告)

「音聲變化の法則の知識なしでは、地理的にも歴史的にも科學的言語研究は不可能であり、音聲學なしではその検討は單なる文字變遷の機械的列舉に終はる」

(「ソリ・スキート」音聲學概論」の序)



(出文協承認) 807

昭和十三年二月十日 印刷
昭和十三年二月十五日 發行
昭和十七年八月五日 第七版發行 (五〇〇部)
昭和十八年六月廿五日 第八版印刷
昭和十八年六月三十日 第八版發行 (一〇〇部)

著者 大西雅雄

發行兼印刷者 株式會社 文成社
東京市澁谷區幡ヶ谷本町三丁目五二七

印刷所 株式會社 文成社
東京市神田區錦町二丁目五番地
東京一三二

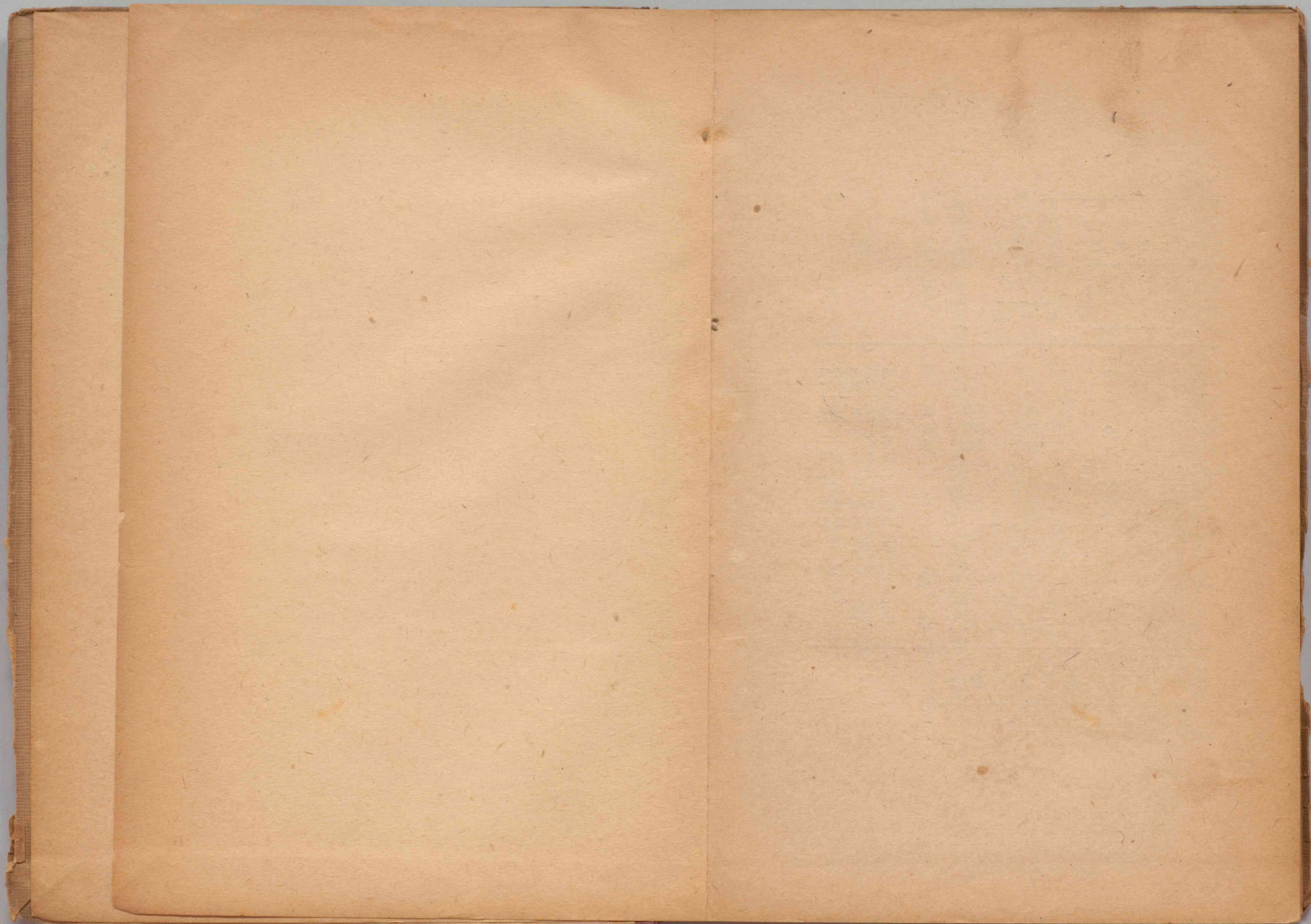
發兌 株式會社 文成社
東京市神田區錦町二丁目二番地

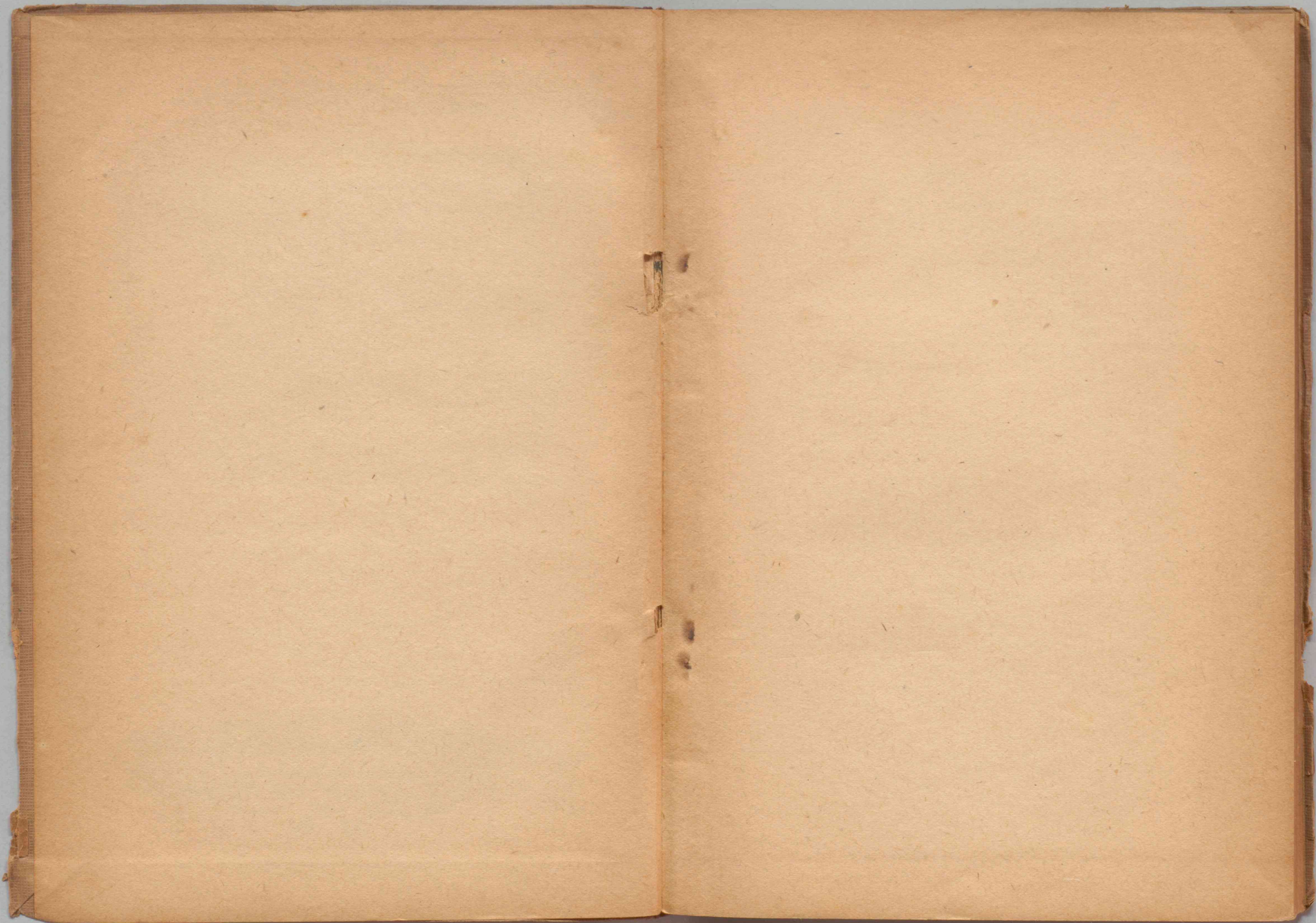
配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

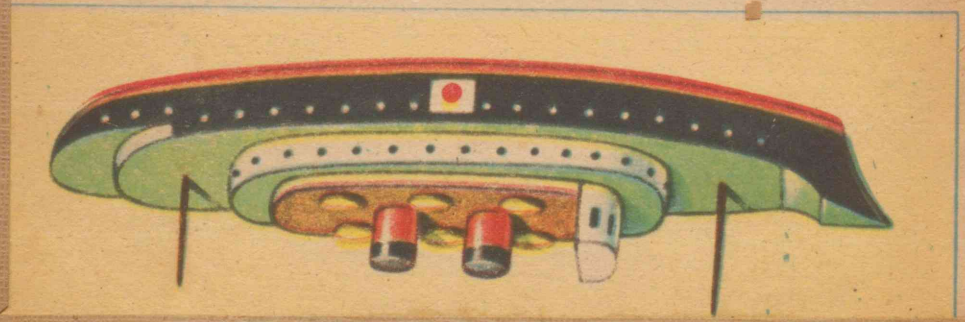
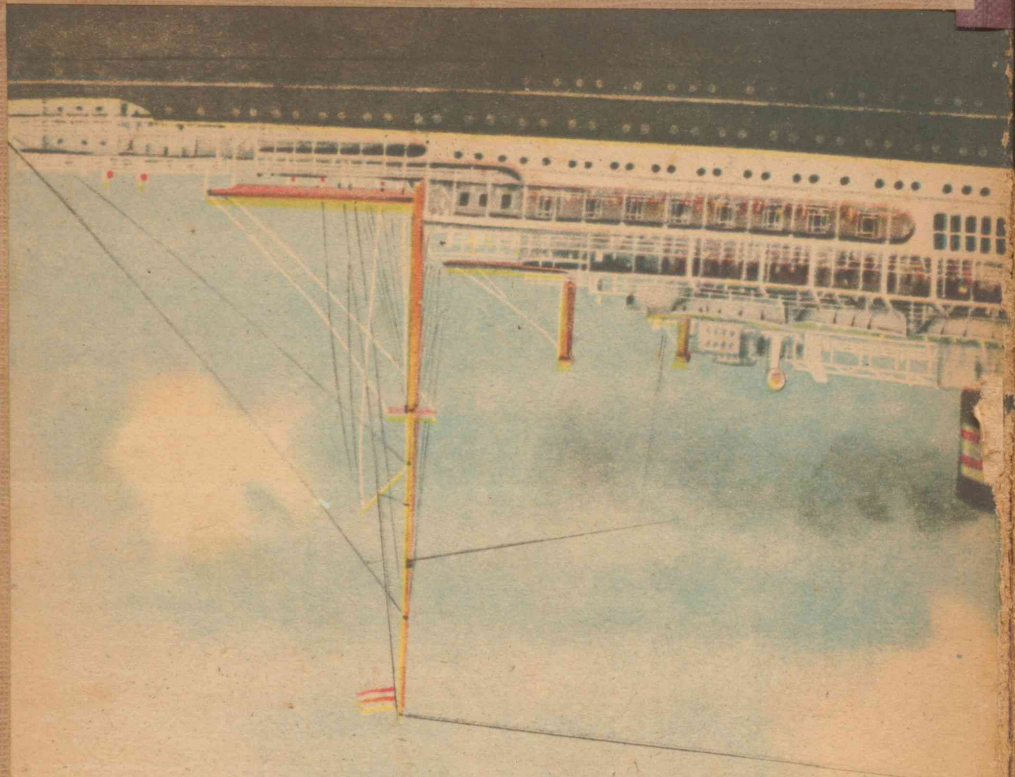
◎ 國語音聲學教科書 全

[定價金八拾錢]









広島大学図書

2000019770



3

70

品 渡 傳 票 品 渡 番 號 C 29

振 阿井謙三 殿

東京市神田區美土代町一八番地

株式會社 文 學 社

電話 神田 (25) 〇三五一番
攝替 東京 三八七八番

No. 昭和 19 年 11 月 16 日

帳合先	書 名	卷數	部 數	單 價	金 額
	國語學聲學教科書	1		x	800
	送印 其他			x	200
				x	
				x	
		送金		x	300
				x	
				x	
				x	
				x	
				x	
				x	
				x	
				x	

殿

通 帖
番 號

注 * 御受取の際は必ず御引合せ下さい
意 * 此の傳票は是非御保存を願ひます

總
冊
數

小 計

1500